

# 伊賀良中島平

埋蔵文化財発掘調査報告書

—縄文早・前期・弥生後期・古墳時代の集落址—

1977. 3

長野県飯田市教育委員会

農業構造改善事業に伴う遺跡発掘調査は、過去数年に亘って実施してきたが、その都度先人の残した貴重な文化遺産のすばらしさに触れることができ、遺跡、遺物を大切に保護、保存し、或は記録として残し学術調査研究の資料とし、また一般の人々にも出土品等を觀賞する機会を与えて理解を深めていただくことの重要性を感じているものであります。

今回は伊賀良地区でも東側にあたる三日市場中島平地籍の発掘調査を行った。

この地帯は水田と一部桑園などの耕地であったので、農業構造改善事業関係者と十分協議を行ない、関係面積が広いので地形的な調査を行なったうえで重点地区を設定して実施した。それでも相当の日数と費用を要したが、調査関係者の献身的努力によって所期の目的を果すことが出来た。

調査団長の佐藤勉信氏、調査員の今村正次氏と指導に当たられた大沢和夫、今村善興、松島信幸氏の3氏、期間中発掘に当たられた作業員の骨折に感謝し、尚佐藤氏は図版や写真のほか出土品の整理保存などに意を用い、立派な報告書をまとめられたことに対し、深甚なる謝意を表し、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和52年3月

飯田市教育長

森 本 信 也

1. 本書は昭和51年度第2次農業構造改善事業に伴う飯田市三日市場中島平地籍の発掘調査報告書である。
2. 本書は報告書作成の期限があり、このため調査結果について十分な検討、研究がなされず、資料提供に重点をおかざるを得なかった。
3. 編及び執筆は佐藤が担当した。
4. 遺構、遺物の作図・写真は佐藤が担当し、製図は遺構を中平一夫、遺物を田口さなまに労をわずらわした。
5. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmであらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

## 目次

序	2
例 言	3
目次	4
遺物目次	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2 歴史的環境	5
II 発掘調査経過	9
III 発掘調査結果	12
(I) 遺構・遺物	12
1. 住 居 址	12
(1) 縄文時代	12
(2) 弥生時代中期	14
(3) 弥生時代後期	16
(4) 古墳時代	26
(5) 中 世	30
2. 柱列址	32
3. 土 壇	33
4. 遺構外の遺物と石器一覧表	35
III 集落と遺物の様相	36
ま と め	40
調査組織	41
おわりに	42
遺 物 図	
図 版 I. 遺跡 II. 遺構 III. 遺物 IV. 発掘スナップ	

## 遺物図目次

図32 中島平遺跡20号住居址とみる遺物(1:3)	43
図33 中島平遺跡44号土壇出土遺物(1:3)	43
図34 中島平遺跡13号住居址出土遺物(1:4)	44
図35 中島平遺跡1号・2号住居址出土遺物(1:4)	45
図36 中島平遺跡3号住居址出土遺物(1:4)	45
図37 中島平遺跡6号・7号・9号住居址出土遺物(1:4)	46
図38 中島平遺跡8号・10号・11号住居址出土遺物(1:4)	47
図39 中島平遺跡14号・18号・19号住居址出土遺物(1:4)	48
図40 中島平遺跡17号住居址出土遺物I(1:4)	49
図41 中島平遺跡17号住居址出土遺物II(1:4)	50
図42 中島平遺跡16号住居址出土遺物(1:4)	50
図43 中島平遺跡5号住居址出土遺物(1:4)	51
図44 中島平遺跡15号・21号住居址出土遺物(1:4)	52
図45 中島平遺跡7号住居址上層出土遺物(1:4)	52
図46 中島平遺跡出土小形石器・石製品・土製品・鉄器(1:2)	53

## I 環 境

## 1. 自然的環境

中島平遺跡は原田市三日月市場中島平に所在する。三日月市場は昭和31年原田市合併前は伊賀良村三日月市場であった。伊賀良地区は原田市街地の南々西にあって、木曾山脈の前山、笠松山(1325m)、鳩打峠(1173m)、高島山(1398m)の東山麓に位置し、北の原田山脈と南の茂都川(久米川の支流)の強い押し出しによって広大な扇状地が発達し、伊賀良地区の中央部の大部分がこの扇状地にあるといえよう。この扇状地の中央部の東端に三日月市場がある。

北はアマツラ沢を隔てて下殿岡の伊那谷第2段丘の平坦面が東に長くのび、南は中村区へと扇状地が連なり、西は前山からの扇状地が大潮木区から続いてきているが、東は扇状地の先端部となって複雑な地形を呈している。

中島平は三日月市場の中心部の北にあって、南の新川と北のその支流アマツラ沢が東流して合流する地点から西に、三角形に二つの川にはさまれてできた舌状の新しい扇状地に遺跡は立地し、標高508m～517mを測る。この扇状地の東端部から新川、アマツラ沢の浸蝕は深まり、浅い谷を形成して竜丘地区新井原へと続いている。中島平は、北の下殿岡面とは高差10m、南西の三日月市場の中心部とは高差27mを測る低位の扇状地にある。

微地形をみると断川の北東岸—遺跡の西は小高い小台地が張り出し、畑地地帯となっており、低位扇状地地面は水田地帯となって東西に長くのびている。この扇状地地面は、アマツラ沢に面し崖端部から南西に向って緩い傾斜をなしている。おそらくアマツラ沢の旧流路が小台地の裾を通過していたものとみられ、そこは黒土の堆積は深く、溜田状をなしている。また新川のすぐ北岸は氾濫地帯をなし水田地帯となっており、古くから水田が開けていたものとみられる。台地の北側から東にかけてはやや高峻な地帯となっており、ここに集落は形成されていた。

## 2. 歴史的環境

木曾山脈の前山の山麓には、茂都計川上流の矢平では弥生後期と平安時代の遺跡として知られ、孫兵衛屋敷、牧平、大坂原遺跡では縄文早期押型土器の出土をみており、各時期の遺物の包蔵量も多い。北にきて佐久良社付遺跡があるほかには高位にある遺跡は今のところ発見されていない。扇状地上方の遺跡には笠松山の北の山裾にある立野遺跡は縄文早期押型土器の立野式の標準遺跡である。この他縄文前期、中期、後期の土器の出土もみている。立野遺跡の一段下に山口遺跡があり、縄文前期末の土器が標式となっている。また、この付近から南に続いて縄文前・中期の遺跡は多い。

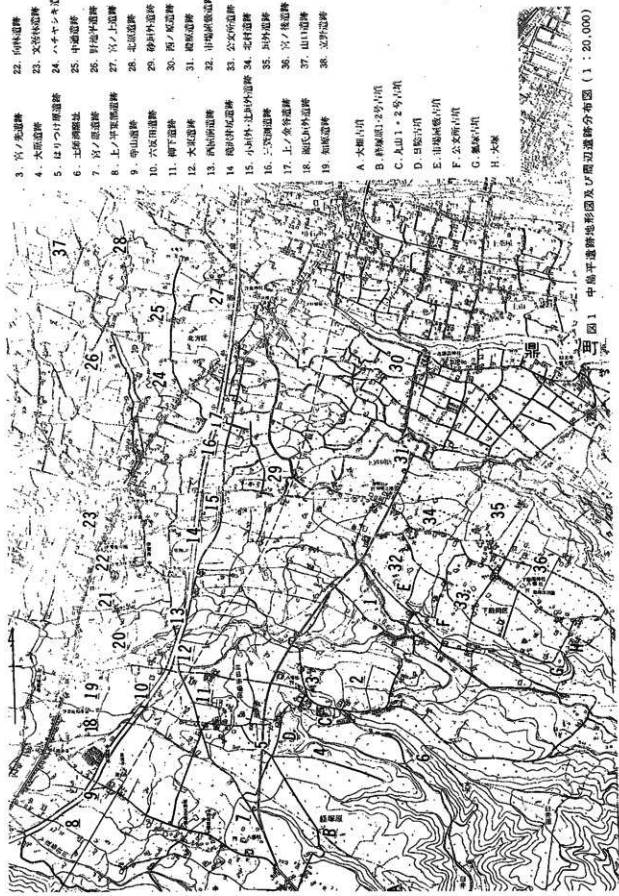


図1 中島平遺跡地域図形及び周辺遺跡分布図(1:20,000)

中央道は扇状地中央を通過しており、その遺跡発掘調査では、ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外・辻垣外・三壺洲・上ノ金谷の11遺跡が調査され、縄文時代では小垣外遺跡で前期末住居跡と土埴群、中期では上の平東部・酒屋前・滝沢井尻・辻垣外・小垣外で加賀居E期の住居跡が発掘調査され、小垣外では後期の良好な資料も発見されている。弥生時代後期では大東・酒屋前・滝沢井尻・上の金谷で住居跡が発掘され、良好なこの期の資料を得ており、滝沢井尻の方形居跡より鉄剣2口の主体部出土は注目される。古墳時代では三壺洲・上の金谷で住居跡が発見され、平安時代では六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺洲・上の金谷で住居跡が検出され、小垣外では緑釉陶器の出土をみており、中世では酒屋前を中心に集落の存在も予想されている。

扇状部から段丘面にかけては、扇状面の浸蝕も深まり、古地上の水利は悪く、遺跡は川に面す所に立地する傾向を示しているが、この面での調査は西の原遺跡以外にはなく、ここでは縄文中期勝牧期の住居跡3が発掘され注目されている。

中島平遺跡周辺をみると新川に面した段丘端部に遺跡は多く、隙間面ではアマツツ沢を隔てた北に縄文中期の遺跡の市場屋敷、公文所遺跡があり、南は新川を隔てて下ノ城・宮ノ先・大原遺跡があり、下ノ城は中世の城跡として注意すべき所とみられる。これら遺跡の西にはやはり原遺跡がある。ここは縄文中・後・晩期、古墳時代の遺跡として知られ、都市計画街路知久町一・中村線の工事後の掘削で切採りに住居跡2が検出されたが、時期は不明であった。中島平の南東、臼井川に面した浸蝕谷に切採器の窯址土器窯(かわらけぼら)がある。

伊賀良地区の古墳は43基があげられている。残存するものは9基であり、石室は破壊され、墳丘を僅かに残すにすぎないものが大半である。古墳分布は松川に面す扇状部、新川の兩岸の段丘端部、茂郡計川に面す段丘端部に東西方向に並んでいる。その他散在する古墳が僅かに見られる。多くは新しい時期の古墳とみられ、規模も小さい。

中島平周辺では、北に市場屋敷、公文所、飯塚、大塚古墳が新川に面した段丘端部に並び、南には丸山1・2号、日隆古墳が段丘端部にあって、これより南に経塚原、大塚古墳がある。大塚古墳は伊賀良地区で最大規模の古墳では完全消失、壺甕鏡の出土をみており、内部構造は不明で、古い古墳とみられる。

伊賀良地区は古代東山道伊賀良の所在地ともみられているが、それに対する確証は得られていない。伊賀良の庄の名は平安時代にあらわれ、文献によれば中村、久米、路岡、殿岡の諸郷が含まれ、松川以南、阿知川以北、竜西地区一帯とみられ、中世末には伊賀南端の新野まで伊賀良庄と記されているが、その中心が伊賀良にあったものとはいえない。中世には北条江馬氏が地頭となり、北条流亡後、小笠原氏が信濃守職職となって来住し、小笠原氏の力によって伊賀良井の開墾が行われ、伊賀良地区の大開墾が進んだ時期とされている。伝承によれば、伊賀良の要所に小笠原氏の武将が配置され、中島平のすぐ南の古地一ノ下城もその居城の一つとされている。

注1 神村達「立野式土器の編年的位置について(1)・(2)・(3)」 信濃20の10-12・21の3  
2 「長野県中央遺跡文化財包蔵地発掘調査報告書一原田内その2」 昭和47年発  
3 伴信夫・宮沢昭之「長野県飯田市伊賀良ノ原遺跡発掘調査報告書」 信濃19の12  
4 市村成人「下伊勢史」第2巻 昭30  
5 筒井恭典「室町時代の伊賀良」 伊賀良村史 昭48

## II 発掘調査経過

第2次農業構造改善事業原田市伊賀良地区の昭和51年度計画は三日市場中島平において実施されることになった。中島平は縄文中期の遺跡として知られており、このため工事に先立って発掘調査を行い記録保存することになったのが今次調査である。事業計画面積は13.3haの広面積であるが、大部分は新川の氾濫堆積地帯と埋地帯であり、また遺跡の西側は用地外となっている。期日、費用の制約のため遺跡の主要部とみる厩状地の先端部5,000㎡を調査対象とし、その他は工事中パトロールすることにした。

段々の水田のため、段ごとにⅠ・Ⅱ・Ⅲの調査区を設け、発掘調査は昭和51年11月22日より、12月18日まで行ない、この間工事の進行は早く、このため、調査対象地区外のパトロールも平行して行なわれた。

### 発掘調査日誌

月・日	天候	日	記
11・22	晴	歸村運搬・テント張り・I区 水田の表土をアルトーザで排除、グリット設定 1号住検出	土壇1号・2号検出
23	くもり	休み	
24	晴	1住調査(カノ1個体出土) 2号住検出。掘り上げ	3号・4号・5号住検出
25	晴	調査、2住の集石検出、調査	5住調査
26	くもり 晴	測量	遺物多し
27	晴	1・2住完掘	3・4住調査 完掘
28	晴	日曜日 休み	
29	雪見れ 深い	1・2住 土壇1・2号測量	調査、3住完掘
30	晴 土凍る	土壇群1検出	4住完掘 3・4・5住測量
12・1	晴	完掘 6号住検出	I区全体測量 II区の調査にかかる。排土作業 (アルトーザ)
2	晴	調査	土壇群1測量 7号住検出調査
3	くもり	完掘測量	8号住検出 上部集石あり調査測量、完掘測量
4	晴	9・10・11・12号住検出 終日排土作業	
5	晴	日曜日 休み	
6	晴 朝凍る	調査	8・9住掘り上げ
7	くもり 寒い	測量	10・11住掘り上げ 11住の南に12号住検出 8住の北に縄文の住居址を検出(13号住) 田区水田の表土アルトーザで排除



図2 中島平遺跡農業構造改善事業計画区域

月・日	天候	日誌
12. 8	くもり	13住調査完了 10・11・12・13住測量 土壇33・34・35・36号検出掘上げ、測量
9	雪死れ 寒い	14・15・16号住検出 終日排土作業 (朝積雪2cm、凍さをます)
10	"	5住・12住カマド調査 12住は大きな炉灶となり、11住と同一住居址とみる。 14住調査、粉砕車3こ出土完掃 15・16住調査
11	晴	15住完照 土壇38号検出、掘上げ 14・15住、土壇38号測量 16住調査、床面上部の木炭、遺物を検出測量
12	"	17・18・19号住検出調査 調査
13	はれ くもり	調査 柱列址II(21住)検出調査 完照測量 土壇38・39号検出、掘上げ
14	晴	17住遺物多く 掘上げ、測量
15	晴 風強し	17・18住完照測量 18住調査 松島信幸氏一地形、地質調査 Ⅲ区上の水田のポトロール調査
16	晴・く もり・ 雨	19住、鉄線出土、掘上げ測量
17	晴	土壇群II検出、掘り上げ、土壇44号底部より有香ポイント出土 21住から土壇群I層に縄文早期土器片多し
18	"	20号住検出完了、土壇55・56号検出掘上げ、測量 器材、テント撤収、現場作業終了

その後遺物整理、実測、製図をなし、報告書の作成にとりかかる。

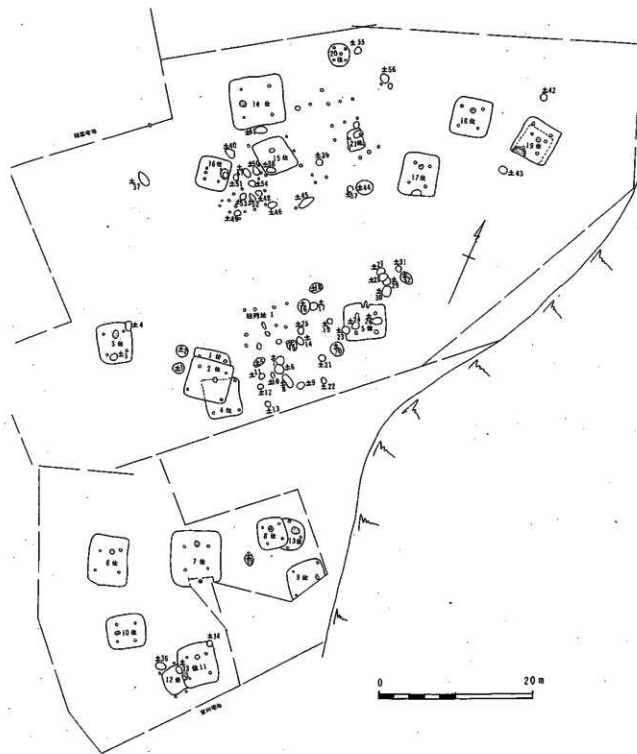


図3 中島平遺跡遺構図

### III 調査結果

#### (I) 遺構・遺物

中島平遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。(図3)

住居址 21

縄文時代2 早期末1 前期末1

弥生時代15 中期末(堀川式)1 後期14

古墳時代2 中期(和泉式)1 後期(鬼高II式)1

中世 2

柱列址 1

土坑 57

遺跡は高い畦をもつ段々の水田で、このため水田造成時に西側の畦が崩れとられ、遺構の破壊されたものは多いとみられ、東側の畦が深い埋土をもっており、上層の遺物は各時期の土器、陶器片が含まれていた。

中島平遺跡の地層は黒色土の下に暗黄褐色土の水成ロームがあって、地山の砂礫層となっており、新しい時期に形成された古地である。遺構は暗黄褐色土層に掘りこまれており、遺構内部の覆土は図6の3号住居址覆土断面図にみるように、黒色土に木炭を含むのが大部分で、壁ぎわに僅かに暗褐色土がみられるが共通である。

#### 1 住居址

##### (i) 縄文時代

20号住居址(図4)

調査区域の最北西部に発見され、水田造成時に壁は崩れとられ、僅かにその輪郭を残すのみであった南北3m×東西2.7m、南東側は狭まり不整形な楕円をなし、地山まで掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、中央よりやや北西に寄って石囲がある。長さ20-30cmの石4こで方形に囲み、内部の一边は10cmと小型であり、外側にも焼土をもつ。西壁に沿って径50cm、深さ18cmの掘りこみをもつが、本址のものか不明である。

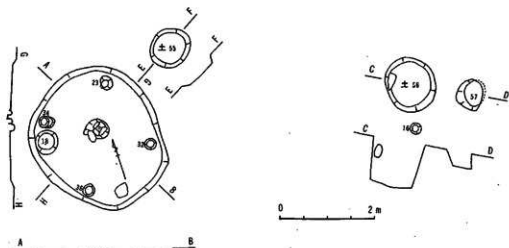


図4 中島平遺跡20号住居址、土坑55号・56号

遺物(図32)住居址内の遺物は水田造成時に崩りとられ、僅かに小片を残しているが、住居址東側の住居址内より運び出されたとみる土中より、住居址内の小片と同時期の土器が多くみられ、本址の遺物と推定された。1・3-6は茅山式の土器で器壁の厚い繊維を含む土器で、同一個体ともみられる。2は相ノ木式に比定される押型文の束期にあたるものであり、いずれも飯田下伊那地方では類例の少ない土器である。石器には7-14があり、12のサイドスクレーパーはチャート製であり、10・11は尖頭器とみられ、14の石鏃、8・9・13の剃片石器があり、いずれも黒曜石製である。7は黒曜石の原石とみるが一面に擦痕がみられ、その用途は不明である。

13号住居址(図5)

調査区の南南東部に発見され、2分の1は8号住居址に切られている。東西径3.8mの円形、暗黄褐色土層に20cm掘りこむ堅穴住居址である。床面は部分的に堅く、主柱穴は3こ発見されているが、その配置からみて4こ、または5ことみら

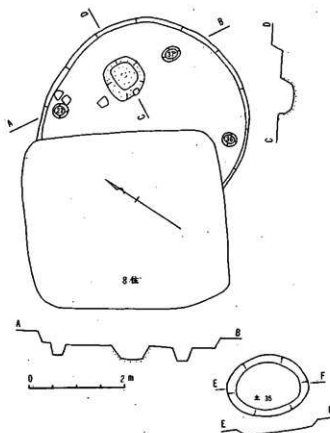


図5 中島平遺跡13号住居址、土坑35号

れる。炉址は北東に片寄っており、85cm×80cm、深さ30mmの隅丸方形をなす地床炉である。

遺物(図34)土器は縄文前期末明ヶ基式を主体とする深床で、口縁部は無文地に半截竹管による大きな刺突文(1・6-8・11-13)が付き、この下に平行沈線文に刻目を施す横帯文、曲線文、斜線文と朝下部にいたるが一般的な文様構成であり、1-4は同一個体とみられる。口唇部に細い粘土紐の貼布と耳状(9)・吸盤状(6)の貼布突起文、円弧文(10)で飾るもの、7の細くて深い沈線を一条めぐらすものがある。5は口縁部に突起をもち、内面を太い液状沈線で飾る。15は地文の斜線文にその上に結帯状浮線文を加飾し、12は半截竹管による条線文に2こ並ぶボタン状の貼布が付く。17も同一系統とみられる。13は縄文の地文を浅い横位の沈線で切り、10は複合口縁をなし、8は口唇部に刺突文の刻み布し、ともに縄文を全面に施すものである。この期の土器はいずれも胎成は堅く、暗ヶ基式土器群は褐色または黄褐色を呈し、縄文を主体とする暗灰色を呈しており、縄文前期末の土器であり、釧田地方の今洞Ⅱ式である。

石器(図34の20-32・46の1-4)床面より打石斧10・横刃形石器1(図34の20-30)と石匕1・石鏃2・石釧1(図46の1-4)の出土をみ、覆土より打石斧1・磨石1があり、釧田地方における縄文中期加曾利Ⅰ期の出土様相と類似する。ただ石匕が黒曜石製であることに相違をのみで注目される。

## (2) 弥生時代中期

### 3号住居址(図6)

調査区域の南西に見えられ、南北5.25m×東西4.75mの隅丸方形をなし、暗黄褐色土層に15-20cm掘りこむ竪穴住居址である。住居址覆土は断面図にみるように木炭を含む黒色土が大部分を占め、壁ぎおに僅かに暗褐色土が入っており、これは、本遺跡の遺構全般にみられるものである。床面は堅く、支柱穴は4こ竝った配置にある。炉址は北側の柱穴間の中央部にある地床炉で、壺形土器片をコの字に立てた類例の少ないタイプである。南壁より盛か入った所と、北の隅に土埴3号・4号が掘りこまれている。

遺物(図36)土器のみで石器の出土をみない。壺、甕、高坏形土器があり、1の壺は炉址の内部にコの字状に置かれていた

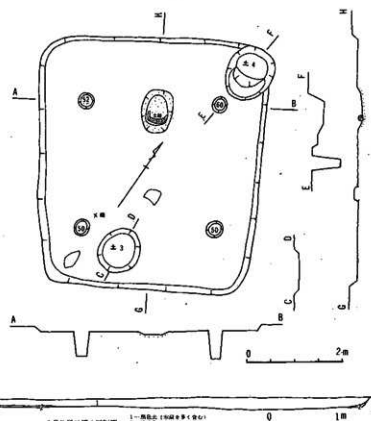


図6 中島平遺跡3号住居址、土埴3号・4号

土器で、大形の胴部は大きく張り、襷指文による頸部に横位の波状文、肩部に縦の短線文をめぐらし、胴部は無文となる。2の蓋の口縁部は受口状をなし、口縁帯に波状文がめぐり、口唇部に刻目が付く。裏には3-5があり、口辺部に3は押し状の、4は縦に切る刻目が施され、胴部は無文となるが、4には荒い刷毛目が、3の頸部には距状具で削った調整痕が付く、小形甕である。5の底部は強い張り出しをもつ。高採(6)は口径29.2cm、推定高さ18.5cmと大形で、深い杯部は強い稜をもって直線的に外反し、襷指文による波状文と横走直線文が交互に施され、器面を飾っている。脚部は無孔で直線的に開き、杯部に比して短かく、器台ともみられ、釧田地方では類例の未見のものである。

3号住居址の土器は、弥生中期から後期への移行期における中期の要素一壺・甕の口唇部の刻目、大形甕の器形、地文一と、高坏にみる襷指文の進歩からみて、釧田地方弥生中期最終末の恒川式として扱ったものである。

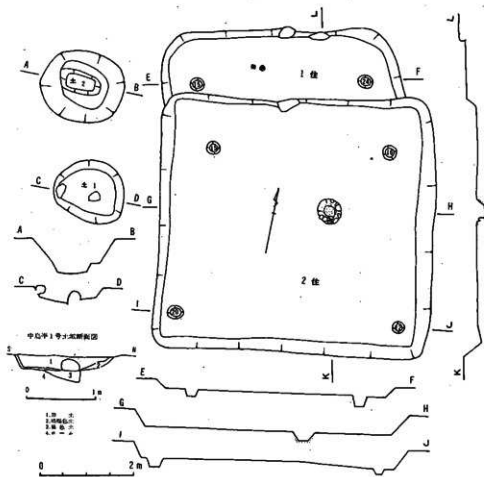


図7 中島平遺跡1号・2号住居址、土埴1号・2号



### (3) 弥生時代後期

#### 1号住居址 (図7)

1調査区の南端部に発見され、4分の1余を残して2号住居址に切られる。東西5.1mなすとみられ、暗黄褐色土に20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は北側に2こ発見その配置からみて4ことみられる。炉は2号址によって切られ発見できなかった。

遺物 (図35の1-4) は土器のみで、石器はない。1の竪はほぼ完形で口径19.6cm、高最大径は中央部にあつて口径と同じである。頸部はしまつて口縁部はくの字状に外反する流文が、その下に胴上半分に3段の左方向の斜行短線文がつく。暗褐色を呈し焼成は堅く石粒を多く含み、器面に炭化物が付着する。3は台付甕の台部、4は甕の底部である。1桓川式の要素を残す鹿光寺原式の古いものである。2は中期ともみる甕の肩部で混入品と

#### 2号住居址 (図7)

1号住居址の南4分の3近くを切っており、また、南東は4号住居址の約2分の1を切っている。南北5.45m×東西5.8mの隅丸方形、暗黄褐色土層に40cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は地山に至っており堅い。主柱穴は4こ、炉址は住居址の中央よりやや東に寄っており、地山の礫がそのまま利用されて、地床炉をつくっている。

覆土から床面直上に礫石 (図8) があり、東壁に沿って2-4群、南西側と北西側に各1群のバードをなし、その配置からみて廃屋基とみられる。これらよりの遺物の出土はみられなかった。

遺物 (図35の5-14) 土器は小破片のみで、その時期は決り難く鹿光寺原式の新しいものか中島式の古いものかははっきりしない。5は横走文と波状文を組合す甕の頸部、7-11は波状文と斜行短文を組合す甕である。

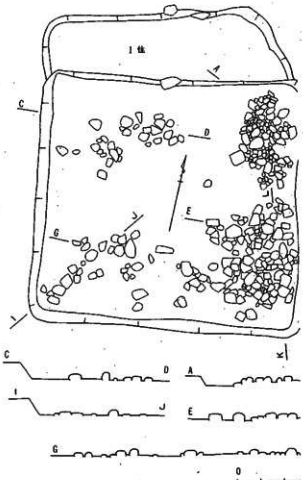


図8 中島平遺跡2号住居址上部素地

丸方形を  
れており

4cm、胴  
部には横  
土には長  
期終末の  
られる。

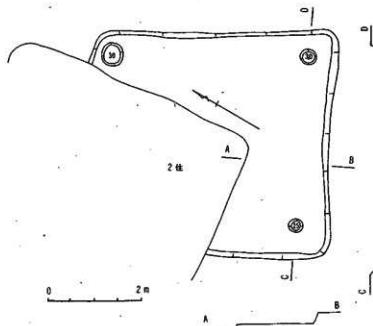


図9 中島平遺跡4号住居址

6は波状文のみの甕とみられ、刷毛目がみられ、中島式の要素をもつものとみられる。12・13は蓋の底部とみる。14の打石弁は刀部を欠きはっきりしないが、その形状からみて縄文期の混入品とみられる。

#### 4号住居址 (図9)

北西2分の1余を2号住居址に切られている。南北5.2m×東西4.82mの隅丸方形、20cm前後の深さに暗黄褐色土層に掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は3こ発見されているが

4ことみられる。炉址は2号住居址に切られ、北または西側にあつたとみられる。遺物は発見されていないが、2号住居址の遺物からみて鹿光寺原式の古い時期のものとする。

#### 6号住居址 (図10)

II調査区の南西に発見され、7号住居址の西6m、10号住居址の北西3.5mにある。南北6.58m×東西5.35mの隅丸方形、暗黄褐色土層に10-15cm浅く掘りこむ大形の竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、北側の柱穴間のほぼ中央に3この石をコの字状に組み枕石とする地床炉である。

遺物 (図37の1-5、図46の7) は僅かに床面にみられた。1・3は蓋、1は蓋の頸部で横走文と波状文がつく。3は胴部で横文である。甕の2・4は、縦く「く」の字状に開く口縁部をもち、2は3本の櫛状具による波状文が頸部から胴中部に3段に施され、4は口唇部に刻目が付き、細い波状文が施されており、弥生中期末ともいえる鹿光寺原式の最も古いタイプである。5の礫石は砂型製で一面のみが使用されている。磨石類の未製品に図46の7がある。

#### 7号住居址 (図11)

II調査区の中間部に発見され、6号住居址の東6mにあり、南東は電柱のため一部調査不能となる。南北7.4m×東西6.7mの隅丸長方形をなし、暗黄褐色土層に30-40cmの深さに掘りこむ大形の竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ整った配置にあり、炉址は北側の柱穴間の中央より僅かに北に寄っており、南側に2こ並ぶ枕石を置く地床炉である。覆土下層から床面に達す礫石 (図12) が、4隅に向う方向に並べられている。廃屋基ともみるものである。この周辺または石の下に床面に密着して、甕・甕の出土をみている。

遺物 (図37の6-12) 床面に密着して甕・甕の出土をみている。6の蓋は口縁部は直に立ち、縦の

沈線をめぐらし、頸部は横走文を、それをはさんで大きな波状文が施され、胴部に刷毛目が付く。中島式にみられるタイプである。7-9の甕は頸部はしまって口縁部は強く外反する。波状文と左方向に向く斜行短線文を組合す一般的な文様構成であり、10は蓋の底部とみられる。9の甕は黄赤褐色を呈し、中島式の胎土にみられるもので、本址は中島式の前半に位置づくものとみる。

11-12は覆土上層出土の土師器で和泉期とみる柄と高杯の頸部である。この他上層部よりは縄文前期末の土器片・灰輪陶器の小破片等の出土をみている。

#### 8号住居址 (図13)

調査区域の南東3mに9号住居址があり、東は13号住居址の2分の1を切っている。南北4.2m×東西3.7mの隅丸方形、暗黄褐色土層に35cm前後掘りこむ小形の竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ整った配置にあり、いずれも袋状に内部が広がっている。北西側の柱次間の中央よりやや南に寄って炉址があり、南に枕石を1こ置き埋篋をもつ埋篋炉である。南壁について出入口とみられる掘りこみがあり、その脇に柱穴1こが付く。炉址の北に土器を置いたともみられる小さな掘り込みが2こ並んでいる。

遺物 (図38の1-6)には土器と石器がある。土器では甕に1・2・5があり、口縁部は強く外反する。波状文と左方向の斜行短線文を施す。2は炉甕で器面は磨かれ、丹塗ともみられる肌合をもつ。3は高杯の胴部で3孔を有し、白っぽい胎土で器面は荒磨きされている。4は蓋の頸部である。石器に6の有肩扇状形石器があり、硬砂岩製で重量205g、ずんぐりしたタイプである。

研究する甕の出現からみて8号住居址の土器は中島式の古い時期に位置づくものとみたい。

#### 9号住居址 (図13)

8号住居址の南東3m、アマツラ沢への崖端部にあり、3分の1は畦のため削り採られている。南北4.95mの隅丸方形、暗黄褐色土層に15cm前後と浅く掘りこむ竪穴住居址である。主柱穴は3こ発見されているが4ことみられ、炉址は東壁の中央部から80cm入った位置にあり、地床炉である。

遺物 (図37の13-16)は少なく、13・14は蓋の口縁部、甕では15の頸部から肩部の16は底部の破片のみである。はっきりいえないが、中島式の古い時期とみられる。

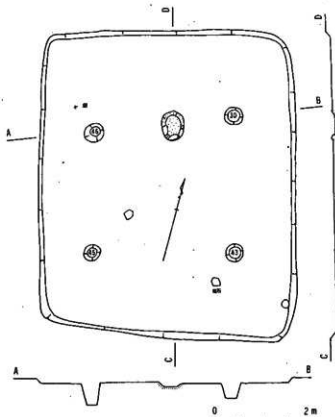


図10 中島平遺跡6号住居址

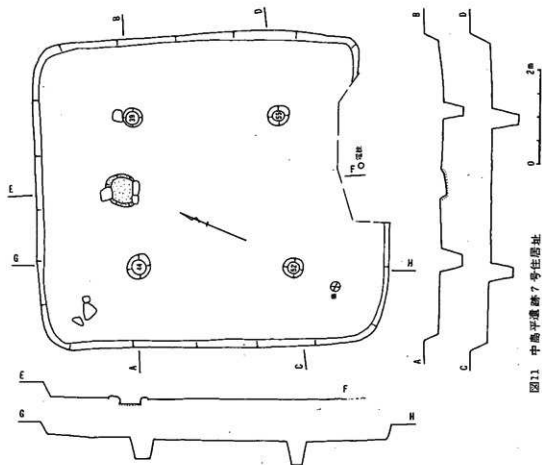


図11 中島平遺跡7号住居址

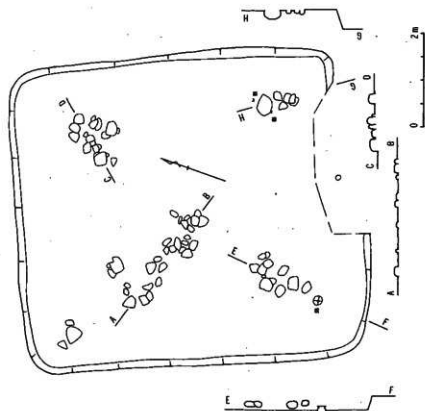


図12 中島平遺跡7号住居址上部築石

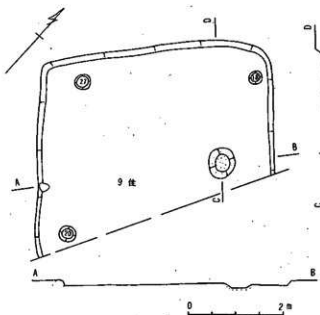
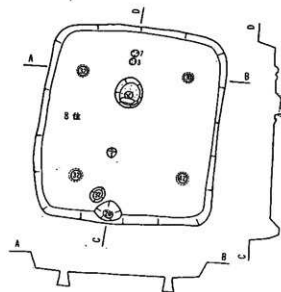


図13 中島平遺跡8号・9号住居址

#### 10号住居址 (図14)

II調査区の南端に発見され、6号住居址の南東3.5m、東4.5mに11・12号住居址がある。南北4.45m×東西5.2mの隅丸長方形をなし、北壁で30m、南壁で15mの深さをもち、暗黄褐色土層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く柱穴4こ、袋状に内部が広がる。炉址は西側の柱穴間の中央部にあり、東側に2この石が並ぶ枕石をもつ地床炉である。東側の出入口にあたる所とみる所に小さなピットが2こ付いている。

遺物 (図38の7・8) は少なく、7・8の甕がある。くの字状にゆるく外反する口縁部をもち、波状文と左方向の斜行短線文のこの期の一般的な文様構成で、塵光寺原式の新しい時期とみる。

#### 11号・12号住居址 (図15)

調査区域の南端部に発見され、10号住居址の南東3.5mにある。11号・12号址は切り合い関係はみられず、連続した状態にある。11号址は南北5.65m×東西5.3m、12号址は3.8m×2.7mの隅丸方形をなし、11号で30-35m、12号で25-30m暗黄褐色土層に掘りこむ竪穴住居址である。いずれも床面は堅い。11号址は竪穴内に主柱穴4こがあり、いずれも袋状をなし、内部が広がる。炉址は北側の柱穴間の中央部において、南側に枕石1こを置く地床炉である。東隅には灰層墓とみられる集石があり、その下より床面に接して壺の出土をみている。

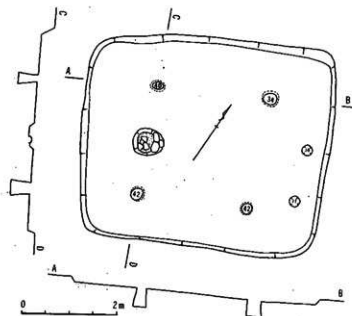


図14 中島平遺跡10号住居址

12号址はテラス上の四方に柱穴が配置されている。11号、12号址の北隅に土坑34・33号が掘りこまれているが、それらは形状と位置からみて住居址に付く貯藏穴とみ方が妥当かもしれない。

11号と12号との間にカマドともみられる焼土塊が検出され、焼土断面図にみるように上部に石と焼土があって、下部は掘りこみとなって木灰と木炭が充満し、その中に発生後期土器片が僅かにみられた。カマドの形態はなく、上部焼土を取去った跡は地床炉状となり、掘りこみ部の周辺は焼土をもち、11号址床面より5cmの高さをもつ舌状の張り出しをなしている。その状態からみる限り、11号址に関連するものとみられる。11号・12号址の関連は十分に検討がなされなかったが、12号址は11号址に付属する特殊な施設—大きな炉址をもつ—と考えられた。12号址よりは、またその周辺よりの遺物の出土は掘りこみ内部の土器片以外は皆無であった。

遺物 (図38の9-18) 11号住居址の遺物は比較的多く、とくに灰層墓とみる東側隅の集石周辺とその下部の床面に密着して壺の出土が多い。9-12の壺があり、9は口縁部は欠け不明であるが、頸部の横走文をほさんで振幅の狭い大きな波状文がつき、胴上半部に2段の4分の1円弧文がつく。10は頸部の横走文の下に斜行短線文が左方向に、その下に右方向がめぐらしている。口縁部11・12は口縁部は斜めに内側に折れ、11は縦の波状文、12は波状文をめぐらしている。甕15はくの字状に緩く外反する口縁をもち、文様は波状文と斜行短線文の組合せ、16は細かい帯描き波状文が2段に、17は短線文が2段につきものである。高坏に13・14があり、13の坏部は大形、縁をもつて、緩い弧を描いて外反し、14の脚部は3孔を有している。11号住居址の土器は塵光寺原式の古い時期とみられる。

#### 14号住居址 (図16)

II調査区の北西において、最も近い発生後期住居址17号とは16.5m西に、また南は20m離れて1号住

厩址がある。南北6.55m×東西7.1mの隅丸方形をなし、暗黄褐色土層に20cm前後の深さに掘りこむ大形の竪穴住居址である。床面は部分的に堅く主柱穴は4こ、整った配置にあり、西側の柱穴間の中央部に地床炉がある。南壁ぎわ床面に蓋・襖・有屑層状形石器の出土をみ、西壁ぎわの覆土下層から床面にかけて3この紡錘車が重なる状態で出土している。南壁に沿って3か所、北壁より1.4mはいた所に1か所、焼土の塊りがみられた。

遺物(図39の1~6・46の9~12)床面出土に蓋、台付襖・有屑層状形石器がある。1の蓋は壳形、口径12.1cm、高さ25.7cm、最大径は胴中央部にあり、20cmソロバン球状に強出し、口縁帯の立上がりはやや内部に折れ、縦の沈線がめぐり、頸部の横走文は一回転による最後のはね上げを見せている。横走文はきざんで口縁部と肩部に波状文が付き、胴上半部に僅かに右方向の斜行短線文が施され、口縁内面にも浅い沈線がめぐらされている。施文具は歯の浅い細かい櫛状具によるもので、細く浅い線で飾られている。2の台付襖は上部を欠く以外は完形で、口径19.3cm、推定高さ24cm、胴最大径は中部にあって丸味をもつ。波状文と左方向の斜行短線文の組合せで、胴上半部は刷毛目、下半部は寛唐となっている。5の襖も文様は同じである。蓋・台付襖ともに座光寺原式の典型といえよう。3・4の高坏は覆土出土で、3は浅い坏部での字状に口縁部は外反する。4の強い稜をもつ坏部は深くて大形のものともみられる。6の有屑層状形石器は硬砂岩製、重量125gの小形のものである。紡錘車(図46の9~12)完形品3こと未製品ともみられる楕円板(9)1この出土をみており、10は一面に放射状の沈線がつく。

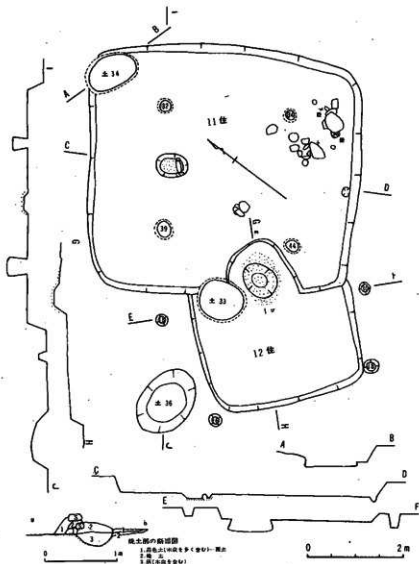


図15 中島平道跡11号・12号住居址、土坑33号・34号・36号

14号住居址出土紡錘車一覽表

図番号	No	材質	径(mm)	形状	重量(g)	厚さ(mm)	備考
46	9	砂岩	7.0×6.2	楕円	100	1.3	未製品ともみられる表面に櫛状がつく
#	10	#	5.5	円	40	0.9	一面に放射状沈線
#	11	#	6.3	#	40	0.7	
#	12	#	5.7×6.1	楕円	48	0.9	

17号住居址(図17)

田岡池区のほぼ中央部にあり、18号住居址の南3.5m、16.5m西に14号住居址がある。南北5.9m×東西5.1mの隅丸方形、暗黄褐色土層に50cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、3こは袋状に内部が広がり、1こは二重となっている。土器を置いたとみる浅い掘りこみが4こあり、この周辺よりの土器の出土量は多い。炉址は北側の柱穴間の中央より南に寄ってあり、南側に2この石を並べ枕石をもつ地床炉である。南壁の中央部に出入口の輪股とみる掘込みが付いている。覆土下層から床面に達して、住居址の南側に3列に南北方向に並ぶ黒石があり(図18)周辺より床面に接して土器の出土は多く、麻屋墓とみるものである。

遺物(図40・41、46の8)床面出土に蓋・襖・台付襖・高坏・砥石・紡錘車がある。蓋1は口縁部は大きく外反し、口縁部の上立りは短く内部に折れ、最大径は胴中部にあって球状をなす。器面にははがれて文様を消失している。2~4の口縁部と11・12の破片があり、口縁部の上立りは内側に折れ、座光寺原式の形態をもち、縦の沈線をめぐらしているが、4は櫛状具によってそれが密に施されている類別の少ないものである。口縁部から頸部は波

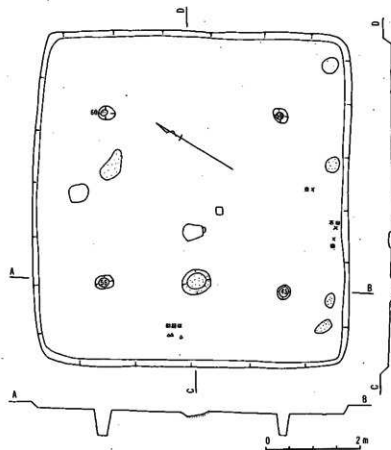


図16 中島平道跡14号住居址

状文と横走文を施す一般的な文様構成である。

甕の8~10はほぼ完形で、8は口径19.9cm、高さ27.9cm、9は口径20.5cm、高さ23.8cm、10は口径20cm、高さ24.6cm、8・10は胴部がふくらみ9は胴の張りの少なく、口径より胴部径が小さくなる二つのタイプがみられる。いずれも頸部はしまって口縁部はくの字状に強く外反を示している。台付甕5~7は脚部を欠くが他は完形で、強くしまった頸部から口縁部は大きくくの字状に外反し、胴部は大きく張り、5のように球状になるものがある。14は台付甕の脚部である。甕・台付甕の文様は6の波状文のみを除いて、波状文と左方向の斜行短線文の組合せで、胴上半部に斜毛目が、下半部は寛頸調整がみられる。13は高坏の脚部で3孔を有している。17は磁石とみられる片麻岩製であり、両面と3断面が使用されている。図46の8の紡錘車は2分の1を欠くが、径4.6cmと小形で、材質は石とはみられず、精選した粘土による土器とみるもので側面を削り、両面に擦痕がみられる。

図41の18~20は覆土上層よりの出土で、18・20は有段口縁をもつ壺形土器であり、19は内面に強い稜をもって外反する口縁をもつ甕形土器で、古墳時代前期の土師器である。遺構は発見されないが、この期の住居址の存在は平型され水田造成時に削りとられたものとみられる。

#### 19号住居址(図19)

東3.8mに19号住居址が、南3.5mに17号住居址がある。南北5.2m×東西5.2mの隅丸方形をなし、暗黄褐色土層に25~30cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4こ、炉址は北側の柱穴間の中間より、南に寄ってある地床炉である。それより南80cmに炉址状の木炭を多く含む掘りこみがあるが、焼土は内部にはな

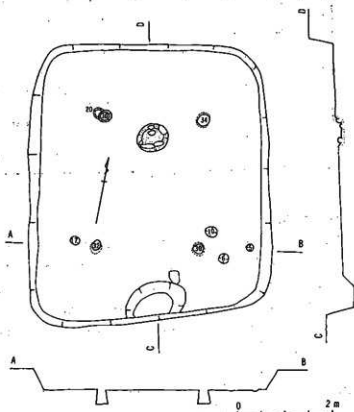


図17 中島平遺跡17号住居址

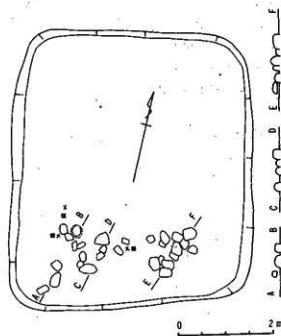


図18 中島平遺跡17号住居址上層木炭

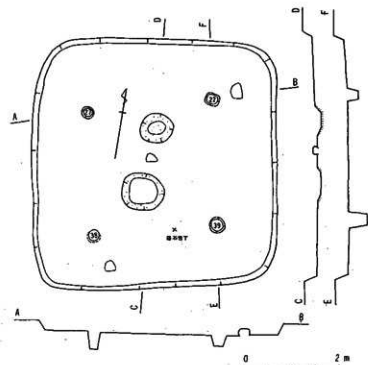


図19 中島平遺跡18号住居址

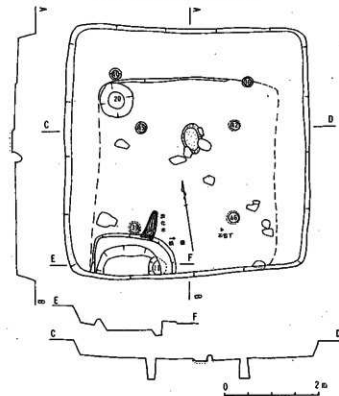


図20 中島平遺跡19号住居址

く、短期間使われて、移し替えられた炉址とも考えられる。

遺物(図39の7・8)は僅少で7の甕と半壊の磨製石包丁の出土を床面からみたのみである。7の甕は口縁部はくの字状に外反し、文様は頸部がはがれているが波状文と左方向の斜行短線文を組合す一般的な文様構成で、座光寺原式の新しい時期とみられる。8の磨製石包丁は2分の1を欠く。緑泥片岩製で1孔を有す。図示していないが上層より土師器の前・中期とみる破片磁点の出土をみている。

#### 19号住居址(図20)

Ⅲ調査区の北東端部に発見され、東は11mでアマツラ沢への浸蝕崖となるが、この間は水田造成時に荒れており、遺構は発見できなかった。西3.8mに18号住居址がある。南北5.3m×東西5.2mの隅丸方形をなし、30~40cmの深さに暗黄褐色土に掘りこむ竪穴住居址である。住居址内に南北4.15m×東西3.7mの隅丸方形となる古い住居址がある。北側に僅かに壁の跡を残し、北西隅に貯蔵穴とみられる掘りこみがある。整った配置をなす4この柱穴をもち、北側の柱穴間の中央部に地床炉がある。炉と柱穴はそのままにして北側に拡張され、旧北壁に沿って2この柱穴が配置される。南壁の中央より西に寄って壁に沿う150cm×60cm、深さ25cmの掘りこみがあり、掘り上げた土で周囲を囲んでいる。内部は木炭と灰が充満しているが焼土はなく、この外側に炭化木であるが焚火の跡とは認め難いものでありその性格は把握できなかった。

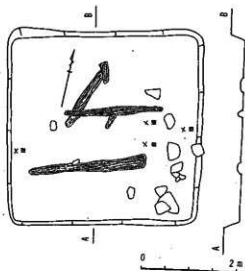


図21 中島平遺跡16号住居上層

#### (4) 古墳時代

##### 16号住居址 (図21・22)

調査区域の最も西に発見され、中世の15号住居址の西3.5m、弥生後期の14号住居址の南4.5mにある。同時代の住居址は他に発見されていない。南北4.15m×東西4.1mの隅丸方形、暗黄褐色土層に25cm前後掘りこみ整穴住居址である。床面は整く全面が焼けて赤くなっており、床面に炭化木が横たわっていた。(図21) 主柱穴は4こ整った配置にあり、炉址は西側の柱穴間の中央にあり、浅い掘り込みの地床炉である。炉に向いた東壁に付いて、大きな深い掘り込みがあり、掘り上げた土を周囲に盛土している。内部は木炭、灰が多く含まれていた。炉址の北西に灰層とみるピットがあり、この中より壺1個体と高杯の出土をみている。古墳時代中期前半とみる住居址である。

遺物(図42、46の13)床面とピット内出土で土師器には壺・甕・高杯があり、5・6の広口甕は完型5は口径13.2cm、高さ11.7cmの丸底暗褐色を呈し6

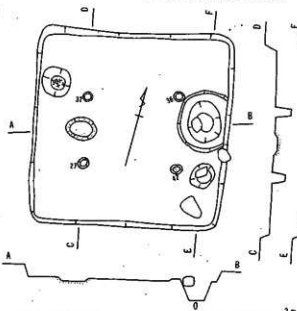


図22 中島平遺跡16号住居址

遺物(図39の9~18、46の16)は少く、床面より座光寺厚式とみる甕に9~12があり、13は無文の碗形の杯部をもつ高杯とみられ、14は高杯の浅い杯部であり、15の打製石包丁は刃部両面が局部磨製となっており、重量41g、緑泥片岩製である。図の46の16は南壁に掘りこみに僅か離れた北東の床面に密着して出土した鉄鏝である。長さ12cm、中央部幅2.2cmの完型。柄の付着部は折返しとなり、刃は左利きにつけられ、蓋をもっている。図39の16の打石斧は柱穴内の出土で、石根ともみられるが、弥生期の石斧とははっきりといえない。覆土上層の17・18は前期土師器で有段口縁をもつ17の甕と、18はその胴部とみる刷毛目甕をもつ破片であり、18号住居址上層出土の土器とともに注目される。

は口径14cm、高さ12.9cmの平底、赤褐色を呈す。ともに最大径は胴中部にあり、頸部はしまって内面に強い稜をもち、口縁部はくの字状に強く外反している。輪積成形で5は内外面に指圧痕がみられ、器面は横なで整形が施されている。甕には1~4があり、1・3は胴部は球状、2はやや長胴とみられる。頸部はしまって外反する口縁をもち、内面に強い稜をもつ。口縁部は横なで、胴部は刷毛目整形がみられ、特に3の胴部は刷毛目痕を濃厚に残している。7の碗形土器はほぼ完形で口径10.3cm、高さ5.5cm、底部は丸底であるがゆがみをもつ。口縁部は横なで、寛状具による圧痕が内外面に見られ、暗褐色を呈す。高杯には8と9があり、8の杯部は強い稜をもち、口縁部は僅かな弧をもって外反する。刷毛目甕をもつ。9の脚部は僅かにゆがみをもって下がり、裾部は角をもって開く。甕と刷毛目整形が施されている。

10は砥石で表面と側面の2か所が使用され、重量285gの小形の片麻岩製であり、11は石包丁で硬砂岩製、重量45gの粗雑な作りのものである。土製品に図46の13の土玉がある。

##### 5号住居址 (図23)

1調査区の最も東側に発見された古墳時代後期後半の整穴住居址である。この期の住居址は調査区域の北の工事中パトロールで発見され既に水田造成時に破壊されたカマド跡を認め、土師器片の検出によって住居址の存在を確かめた以外に発見されていない。

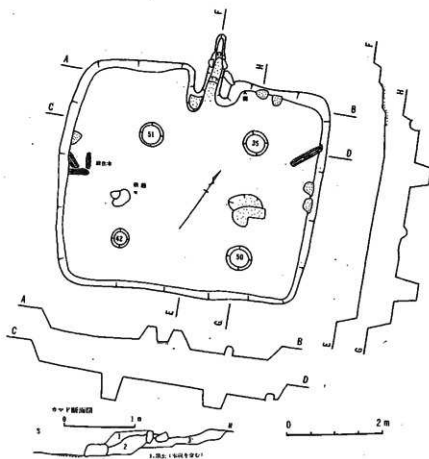


図23 中島平遺跡5号住居址

南北4.9m×東西5.5mの隅丸方形をなし、暗黄褐色土層に40~45cmの深さに掘りこまれ床面に接して炭化物が壁に沿って炭化木、焼土塊がみられ、火災の住居址ともみられたがはっきりしない。床面は整く、主柱穴は4こ。カマドは北壁のほぼ中央に付き、粘土カマドで、段をもって煙道が通らされている。

遺物(図43・46の14・15・17)土師器、須恵器、鉄器の出土をみている。土師器には壺・甕・杯・高

杯があり、鬼高口式に比定される。図43の4は壺形土器で最大径が胴上部にあり、肩の張る球状をなし頸部から垂直に立上がり口辺部が外反する。口縁部は刷毛目、胴部は寛體とみられ、褐色を呈し光沢をもつ。壺形土器には1~3・5~7があり、1は短胴とみられ、カマド内出土で口縁部は短かく外反し口径28.5cm、肩部に最大径をもち、内外面寛整形を施し、黄白色を呈し甑ともみられる器形である。他はいずれも長胴製で、3はほぼ完形である。口径21cm、高さ40.5cm、器壁は厚く、輪積成形の作りの悪いものである。長胴製はいずれも頸部はしまって口縁部はくの字状に外反し、刷毛目整形が施され、器壁は一般的に厚い。8の杯は赤褐色を呈し、胎土、焼成精良であり、10の碗は内面黒色、表面は暗褐色を呈し焼成は良くない。9の高杯は覆土出土で、内外面ともに黒色である。

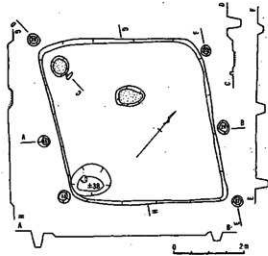


図24 中島平遺跡15号住居址、土趾38号

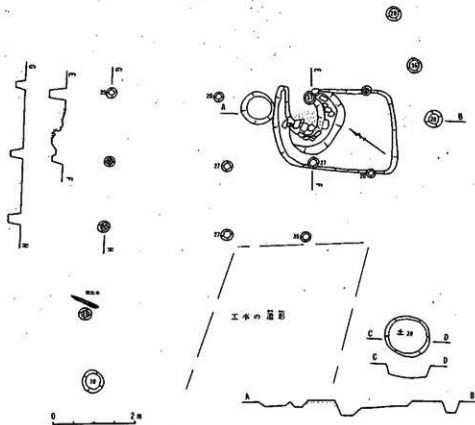


図25 中島平遺跡21号住居址、土趾39号

須窓器には11・12の蓋杯の蓋部(11)と杯部(12)があり、ともに胎土、焼成の良好なもので、奥橋須衛窯産とみられる。鉄器(図46の14・15・16)には球面出土に14・15の鉄鏝がある。14は刃部のみであり、刃幅は広い。15は長頸式尖根鏝で蓋部を欠いている。16の鉄鏝は上層部の出土で本址のものとはいえない。3ここに折れていたが完全に形を残し、柄付着部は折返しとなっている。長さ13.2cm、幅は中央部で3.2cm、刃は直線的に付き、右利きのものである。

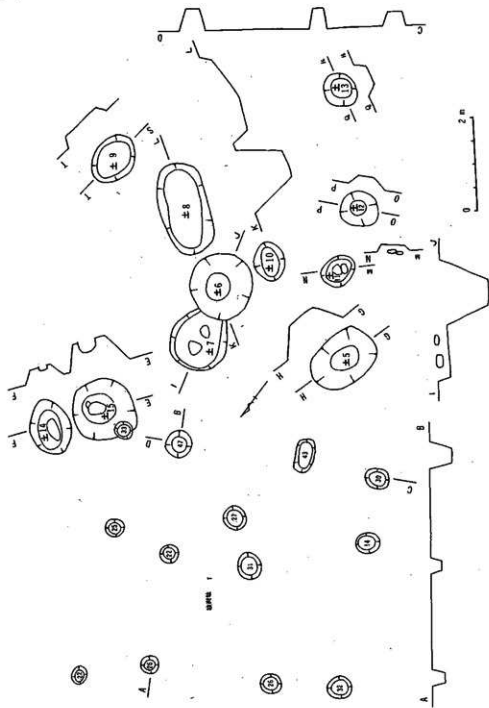


図26 中島平遺跡土趾群1(5号~15号)柱列址

(5) 中 世

15号住居址 (図24)

田調査区に発見され、工事の遺形をはさんで東に同時期の21号住居址と隣接している。4.5m×4.8mの菱形状の隅丸方形をなし、10cm前後暗黄褐色土層へ掘りこむ浅い竪穴住居址である。床面は堅く、竪穴外部に北東側と南西側に各3こずつ6この柱穴が配置されている。住居址を三分分した北西側の中央

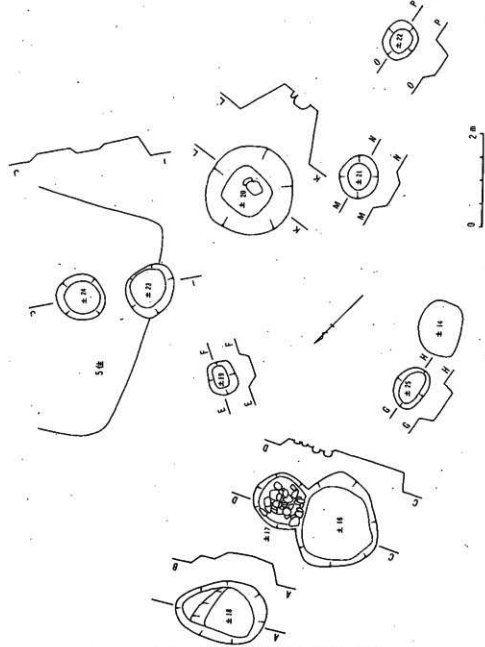


図27 中島平遺跡土坑群 I (16号~25号)

高さ10cmの焼土のマウンドがあり、ヘツツイを置いたものとみられ、また北西隅に焼土をもつ浅い掘り込みがあり、炉址ともみられるものである。南の隅に土壇38号がある。

遺物 (図44の1~6) 中世陶器を主体とし、天目茶碗に1・2がある。1は黒天目、2は黄瀬戸とみられる良質なものである。3は乳白色の灰釉がかかり器形ははっきりしないが、壺の頸部ともとれる。4はアメ釉のかかった皿、スリ鉢(5)、内耳土器(6)があり、図示できない破片に山茶碗がある。

21号住居址 (図25)

工事の遺形をはさんで西に同時期の15号住居址がある。2間×3間の柱列が並び、南東側に南北3m×東西2.05m、深さ15cmの隅丸方形の竪穴がつき、その内部北側は前面に溝をめぐらし、溝の北壁には礎を並べ、マウンドを形成している。マウンド部には焼土があり、ヘツツイを置いたとみられる。

竪穴の東に3こ並ぶ柱穴と、西に2こ並ぶ柱穴と炭化木が発見されたが、それら以外の柱穴は発見されず、本址に伴うものと推定された。

遺物 (図44の7) は少なく、図示できるのは7の天目茶碗のみで、アメ釉が施されている。その他黄瀬戸、山茶碗の小破片等数点がある。

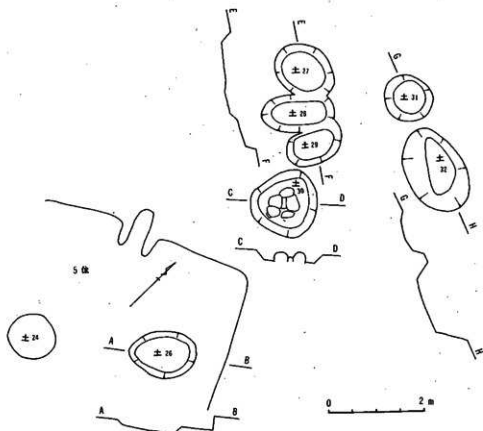


図28 中島平遺跡土坑群 I (26号~32号)



## 2 柱列址

### 柱列址 I (図26)

調査区域のほぼ中央部に発見され、土壌群 I のすぐ西にある。2間×2間とみる建物址とみるがその配列は不規則であり、柱穴群として捉えるのが適当かも知れない。遺物はなくその時期は不明であるが、その位置からみて弥生後期住居址に伴うものと考えられる。

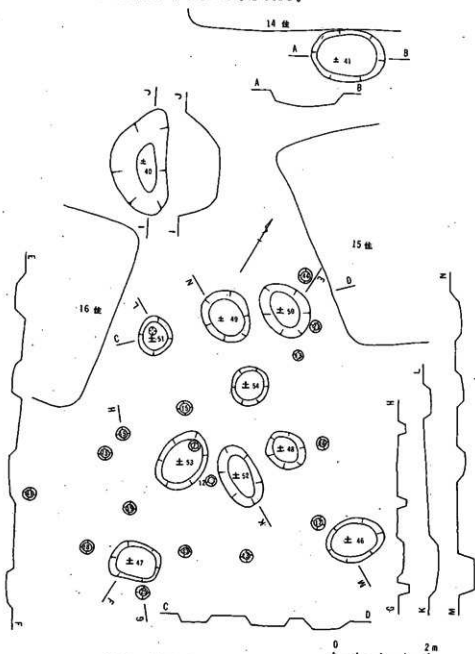


図29 中島平道跡土壌群II (40号・41号・46号～54号)

## 3. 土 塚

1号から57号の土塚が発掘調査さ

れ、I調査区の中央部に土塚群Iがあるが、その北西の田圃調査区に土塚群IIがあるが、その間には発見されていないが、水田造成時に削りとりられ、おそらくI・IIは連続して大きな土塚群を形成していたものと予想される。

周辺に散在するものの中には住居址内に掘りこまれ、その住居址に付属する施設ともみられるがある。44号は径2m余あり、底部より有舌ポイントの出土をみ、覆土中より縄文早期末の土器が検出され、住居址との見方のされるものがある。

次の一覧表にまとめ、特殊なもの、遺物については後に記すことにした。

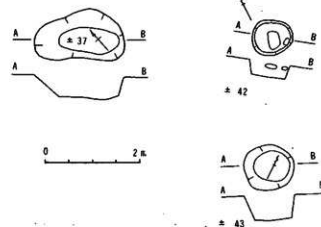


図30 中島平道跡土塚37号・42号・43号

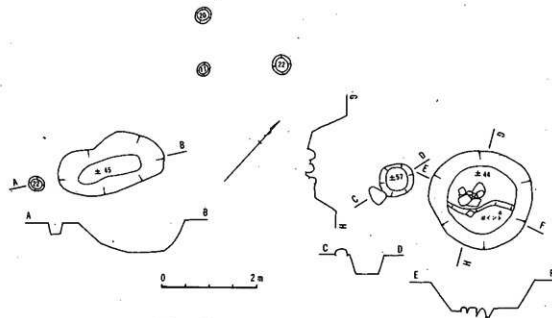


図31 中島平道跡土塚44号・45号・57号

中島平道一覽表

番号	図番号	大きさ(㎝)	深さ(㎝)	形状	主軸方向	遺物	遺物図番号	備考	時期
1	7	130×148	34	楕円形	N85°E	土師器底部(中期)			古墳時代中期
2	8	150×176	77	"	N90°E			2段になる	
3	6	100×86	10	"	N4°W			3号住居址内にある	
4	8	120×88	30	"	N2°E			" 2段になる	

番号	図番号	大きさ(㎝)	長さ(㎝)	形状	主軸方向	遺物	遺物図番号	備考	時期
5	26	145×140	59	#	N16°E	打石弁1			縄文時代
6	#	140×130	103	円	N60°W				
7	#	130×120	22	楕円形	N13°W			土器等に切られる 内部に石2こ	
8	#	200×100	48	#	N50°W				
9	#	112×90	23	楕円形	N5°E				
10	#	85×65	24	#	N48°W				
11	#	70×60	16	#	N1°W	弥生後期土		内部に石2こ	弥生後期 縄文前期
12	#	80×70	20	円	N70°E				
13	#	75×70	20	#	N88°E				
14	#	120×90	23	楕円形	N69°E	縄文前期末土器片 打石弁		内部石1こ	縄文前期末
15	#	130×130	33	円	N90°E			内部大小の石2こ	
16	27	200×175	35	#	N36°E			内部16等に切られる 内部に石がはさま 2段になっている	
17	#	110×120	14	#	N3°E				
18	#	185×135	46	楕円形	N52°E				
19	#	60×70	17	楕円形	N62°W				
20	#	190×190	99	円	N8°W			内部に石あり	
21	#	90×80	18	#	N18°W				
22	#	80×70	20	#	N12°W				
23	#	110×100	50	#	N35°E				
24	#	99×100	12	#	N32°E				
25	#	90×68	34	楕円形	N8°W				
26	28	140×102	13	#	N50°E				
27	#	110×135	32	円	N71°E			土28号と重なり合う	
28	#	150×80	37	楕円形	N31°E			土27・29号に重なり合う	
29	#	120×75	28	#	N20°E			土28号と重なり合う	
30	#	140×140	20	円	N44°E			内部石5個あり	
31	#	98×100	24	#	N74°W				
32	#	120×180	52	楕円形	N74°W				
33	15	90×85	28	円	N21°E			袋状、12号住につく貯蔵 土器	
34	#	80×100	45	楕円形	N74°W			袋状、11号住につく貯蔵 土器	
35	5	140×160	17	#	N60°W	縄文前期土器片			縄文前期
36	15	108×145	44	#	N90°E	黒曜石片2こ			縄文?
37	30	150×160	51	#	N48°W				
38	24	100×90	44	#	N15°E				
39	25	110×100	34	円	N26°W	縄文早期末土器片			縄文早期末
40	29	210×150	76	楕円形	N10°W				
41	#	160×115	32	#	N72°E	中世天目茶碗片2			中世
42	30	76×80	31	円	N60°W			内部石あり	
43	#	110×100	53	#	N62°E				
44	31	208×218	78	#	N20°W	有骨ポイント 出土より縄文早期土器		縄文早期の土器とともみ られる。袋状になってい る。形を窺う。	縄文早期
45	#	228×122	68	楕円形	N38°E				
46	29	125×95	35	#	N55°E	不明石器			縄文?
47	#	109×80	15	楕円形	N72°E				
48	14	95×75	17	楕円形	N58°W				
49	#	120×98	18	#	N56°W				
50	#	100×125	23	楕円形	N66°W				
51	#	80×70	16	円	N28°W				

番号	図番号	大きさ(㎝)	長さ(㎝)	形状	主軸方向	遺物	遺物図番号	備考	時期
52	29	80×135	20	楕円形	N58°E				
53	#	130×100	10	#	N8°E				
54	#	82×80	13	円	N8°E				
55	#	80×90	13	#	N64°E				
56	#	118×110	107	#	N20°E	磁石			弥生?
57	31	58×60	31	#	N20°E			袋状	

#### 土城44号(図31)

土城群IIの東に独立した位置にあり、西3.5mに土城57号がある。南北218cm×東208cm、暗黄褐色土層に最根部で78cm掘りこみ、南東側は一段高くなる。底部に人頭大から拳大の石が一塊り置かれ、床面状に堅い。その面に密着して有骨ポイントの出土をみている。覆土は上層から底部にいたるまで黒色土で、上層から下層にかけて土器の出土が多くみられた。

遺物(図33)1の有骨ポイントはチャート製、精巧な作りである。覆土出土の土器(2-14)は茅の穂の基による条痕文が、口唇部に割目が施され焼成は堅い。縄文早期末の土器である。

土城44号の形態からみて、縄文早期の住居址との見方もあり、飯田地方では初見のものであり、今後には課題を残すものである。

#### 土城39号・35号の遺物(図45の8-10、11-13)

土城39号(図25)は110cm×100cm、深さ34cmの円形の土城で、土城群IIの東に独立してある。遺物は櫛状具による条痕文が施され、8は初目をもつ粘土紐の貼布がつく。縄文早期末とみる土器である。土城35号(図5)は108cm×145cm、深さ17cmの浅い楕円形をなす土城である。7号住居址と8号住居址の間にあり、13号住居址の西3.5mにある。図45の11は爪形土、12-13は縄文が施され、縄文前期の土器で13号住居址と関連するものとみられる。

その他土城46号出土の石器(図45の7)は、断面は2.4cm×2.1cmの楕円をなし、先端部を尖らせている。全面は磨かれ角閃石製である。基部は折れているが、その用途は不明である。土城5号出土の打石弁(図45の6)は長さ16cm、重量190gの硬砂岩製で、基部に僅か自然面を残しており、縄文期のものとする。土城14号出土(図45の2・3)の土器は縄文前期末階式基式であり、伴出の石器は弥生期の石鏡ともみられるが、土器からみて縄文期の打石弁とみない。土城56号出土に磁石(図45の5)がある。弥生後期のものとみだが、はっきりしない。片麻岩製である。

#### 4. 遺構外の遺物と石器一覧表

7号住居址上層からその周辺より縄文中期末加曾利E期の土器片(図45の14-22)が多く出土している。調査区域の南東端部にある住居址で、それよりは用地外となるが、舌状にのびる中島平土地の先端部にこの期の集落の存在が予想される。

遺構	遺物	種別	材質	長さ	幅	重量	備考
縄文時代							
13	46	1	石	石	磨石	3.4 5.5	15 座
#	#	2	石	鑽	#	2.7 1.4	#
#	#	3	#	#	#	1.3 1.0	#
#	#	4	石	鑽	#	3.3 0.8	#
18	住	5	石	鑽	#	2.4 0.9	# 覆土層埋入品
#	#	6	#	#	#	1.1 1.0	# かもど 埋入品
#	#	10	安山岩	#	2.2 1.6		
#	#	11	安山岩	#	4.2 1.6		
#	#	12	ヤマトシズク	ヤマト	3.8 4.4		
#	#	13	割片石	磨石	2.8 1.4		
#	#	14	石	鑽	#	1.4 0.8	
弥生時代							
13	住	20	打石	鑽	11.8 3.7	125 座	
#	#	21	#	#	11.0 4.2	83 #	
#	#	22	#	#	10.8 4.6	102 #	
#	#	23	#	#	9.2 3.2	90 #	
#	#	24	#	#	10.0 3.8	85 #	
#	#	25	#	緑	10.6 3.5	82 #	
#	#	26	#	#	8.0 4.5	95 #	#
#	#	27	#	#	8.1 3.8	53 #	
#	#	28	#	#	10.5 3.5	70 #	
#	#	29	#	#	10.0 4.0	75 #	
#	#	30	横刃形石	#	5.1 6.7	98 #	
#	#	31	打石	斧	9.5 5.0	145 座	
#	#	32	磨石	#	15.0 4.8	290 #	
16	住	42	砥石	舟形	15.2 2.1	285	
#	#	11	打製石	包丁	4.6 7.9	45	

(II) 集落と遺物の様子

中島平遺跡の立地する台地は、最も新しく開析された扇状地で、下層は上流から押し出しによる礫層で、その上に二次堆積によるロームがのっている。新川とその支流アマツラ沢によって形成されている。この台地の上に、縄文早期・前期・中期、弥生中・後期、古墳時代と、中世の遺構・遺物が発掘調査された。かつて分布調査時には用地外の北西よりは平安期の須恵器片が採集され、各時期に亘る遺跡であることが立証された。

(i) 縄文時代

縄文時代早期末とみる20号住居址、土城44号(住居址ともみられる)は調査区の北西の中央部に発見されており、20号址周辺は水田造成時に削採られ、埋土中よりその遺物が多くみられている。おそ

く何軒かの住居址の存在が予想される。

20号住居址とみる土器の主体となるのは茅山式である。織縁を多く含み、器壁は厚く、胴上方に段をつくる深縁で、口縁と段の間に文様がつく。太い凹縁と縄文・沈線・押し文が、口唇部には刻目が施される。押型文土器の最終期の粗ノ木式土器が含まれている。口唇部には列点文がめぐり、横位の山型文と列点文の組合せによって飾られ、口縁部に穿孔をもち、裏面も山型文がめぐらされている。焼成はかくく、褐色を呈している。ともに飯田地方では数少ない好資料である。

石器には小型尖頭器・サイドスプレーバー・割片石器・石鑽がある。

土城44号底部出土の有舌ポイントと覆土下層出土の土器との関連は十分な把握にいたっていない。土器は茅とみる徳壺による糸紋で加飾されている。東海地方との関連の深い早期末とみられる。飯田地方では北ノ城跡で出土例がある。

縄文前期末の住居址は13号1軒が発見され、土城35号にも、この期の土器の出土をみており、9号住居址、7号住居址上層にも遺物はみられ、水田造成時に削りとられた住居址の存在も考えられ、南東の用地外のにびる香状台地上に墓塚が掘開きされているものと予想される。土器は、口縁部を大きな刺突文で、胴部を細い竹管による浮線文に、それを直角に切る刻目が施される平行直線文、円弧文、縞杉文で加飾する嘴式を主体とし、複合口縁をもち全面に斜線文を施すものと、ボタン状の貼付をもつ踏織C式土器が伴出しており、飯田地方の今例II式に比定されるものである。

石器は打石斧を主体とし、床面出土では打石斧10、横刃形石器1、石ヒ1、石鑽2、石錐1があり、住居址の2分の1は弥生後期の8号住居址で切られ、正確な数値の把握はできないが、飯田地方の加曾利E期の住居址出土例とは横刃形石器を除いて、ほぼ同傾向を数的にみせている。加曾利E期の折石斧と横刃形石器の比は3：1以上の量をもつに対して、僅少である。石ヒを除いては、その形状、材質に差違が認められない。

縄文中期末の加曾利E式の土器は7号住居址上層及びその周辺に多くみられている。7号址のすぐ北は水田造成時に削りとられ、さらに北のI調査区には、この期の遺物は発見されていない。7号址周辺にすでに破壊された住居址の存在は予想され、用地外の南東にのびる香状台地面に加曾利E期の墓塚が構成されていたものと考えられる。

(2) 弥生時代

弥生時代では中期末榎川式住居址1と後期原光寺原式・中島式住居址14が調査されている。しかし、水田造成時に削りとられ破壊されたとみる住居址も予想され、集落についての把握は不十分である。弥生中期末の榎川式3号住居址は単独にあり、南と西は水田造成で荒らされ、この期の集落については不明である。土器は、袋状口縁をなし、口唇に刻目をもつ蓋、口唇部を押し引きの圧痕で加飾する碗、杯部を横走文と流状文で飾る大形の高杯、蓋の頸部と胴部みる流状文と縦の短線文の組合せ等は中期の要素を強くもちながら後期への過渡的な様相をもつものとして扱いたい。

弥生後期原光寺原式の古い要素をもつものに1号・6号・11号住居址があり、4号址は原光寺原式の

新しい時期の2号住居址に切れられ、遺物は皆無であったが、同時期とみられ、2号址と隣接しあう。号・4号址と、6号・11号址の単位グループがみられ、水田造成により削りとられた面にも、この居住居址の存在も予想される。

土器は、6号址の竪のソロバン状の胴部の張り、櫛歯文の広い施文をもつ11号址の竪に、裏では6趾にみる口縁の横いカーブをもつて外反し口唇部に刻目をもつものがあり、三段に波状文をめぐらすの、1号址の横波文と三段に斜行短線文の組合せ等に古い要素がみられ、特に6号址の竪には中期末もみられるものを含んでいる。石器は6号住居址より磨石類の未製品1この出土をみたのみで注目される。

座光寺原の新しい時期には2号、14号、17号、18号、19号住居址がある。2号址は南に、14号は西離れ、17号、18号、18号址は調査区の北に3.5m等の距離をおいてある。水田造成で削りとられ、ま用地外の宅地等に存在する住居址も予想され、集落構成を把握するには不十分である。17号・18号・19号址は同一方向に炉をもち、18号址のみ出入口とみる張りこみをもたないが同一グループをなすと思われる。14号址は大形で炉を西側にもち、紡錘車3この出土を、特殊な住居址ともみられるが、西の3趾地に、また北の削採り部にグループする住居址の存在も考えられる。2号址は東側に炉をもち、北に広い削採り面があり、それにグループする住居址は破壊されているともみられる。2号・14号址には磨石とみる集石が発見されている。

遺物は14号・17号址以外は量は極めて少ない。竪の口縁部の上立りが内側に折れる。台付型をもつ櫛歯文にやや洗練さを欠くにみられる以外は次期の中島式と大差は認められなくなる。石器には14号より有肩盾状形石器、17号より小型砥石、18号より磨製石包丁、19号より打製石包丁と柱穴内出土のやや大形の打石斧の各1この出土をみているにすぎなく、飯田地方におけるこの時期の石器出土品としては異例である。紡錘車が14号址では完形3こと、その未製品ともみられる楕円板が出土し、いずれも砂岩製であり、17号址よりは土製の紡錘車の半壊が出品している。

鉄製品では19号址の床面に密着して出土した鉄線があり、石器の僅少さと鉄線の存在は今後の飯田地方の弥生後期の究明に大きな課題を与えたものといえよう。なお、鉄線1こが古墳後期の5号住居址の上層部 - 水田造成時の埋土より発見されており、同じ層より検出された弥生後期の土器片からみて、この期のものと推定される。

弥生後期中島式の住居址は調査区域の南側に集中しており、7号・8号・9号・10号住居址がある。おそらく集落は用地外の南の舌状にのびる台地上に展開されたものとみられる。7号・8号は北側に、9号は東側に、10号は西側に炉をもち、弧を描く状態に4軒が並ぶ。7号・8号と同方向に炉をもつ住居址がグループ構成をなすが、弧を描く状態に向かいあう住居址が集落構成単位をなすかは今後の検討課題である。7号住居址は大形であり、磨石類が検出されており、遺物も比較的多く、特殊な意味をもつ住居址ともみられる。

遺物は全体的に少ないのは、飯田地方のこの期の一般的傾向である。中島式の前半に位置づく土器で前時期の座光寺原後半の土器と大差はない。竪の口縁部は直立し、裏の口縁部の外反が強く、櫛歯文が洗練されてくる。この地方独自の土器では台付型が姿を消し、中島式後半になって東海地方の台付型がはいつてくる。胴上半部に刷毛目、胴下半部は磨石が盛行してくる。また、裏に黄赤褐色を呈す土器が現れてくる。

石器は8号住居址より有肩盾状形石器1この出土をみた以外に、従来の飯田地方における弥生後

期の石器のあり方に問題を提示したものである。

飯田地方の弥生時代の石器は量的にも、器種が多様が特色とみられている。しかし本遺跡での出土量は極めて少なく、有肩盾状形石器2、磨製・打製石包丁各1の他磨石類の未製品1と柱穴内出土の打石斧1である。有肩盾状形石器は小形で作りもよくない。鉄器には鉄線の出土をみており、鉄を鍛いだともみられる砥石2がある。中島平は新川とアマツラ沢の氾濫堆積による開拓された新しい開拓地であり、このため黒土層の堆積は深く、耕作の容易を土壌により、川に沿う氾濫原は水便に恵まれた水田の地である。木器の発見はなかったが(土壌の関係で消滅してしまう)鉄器の保有とともに木器の使用が盛行したものと受けとめられる。

中島式後半の遺構は発見できなかったが、この台地上に存在したものと予想され、古墳時代へと受けつがれている。

### (3) 古墳時代

古墳時代前期とみる土器の有段口縁をもつ壺・甕が18号・19号住居址上層より出土をみている。北側の水田造成削りとりった所にこの期の住居址の存在が予想される。

中期前半とみる土器の住居址に16号址がある。1軒のみの発見であるが北西の削りとり部から宅地にかけて遺構の存在は考えられる。土器には壺・甕・高杯があり、刷毛目を濃厚に残す甕胴部もあり、古い要素を残すものとみられる。石器には小形砥石と打製石包丁の出土をみている。この期に伴う打製石包丁は横面を僅かに欠いた粗雑な作りのもので、清水遺跡では多くの出土例をみている。

古墳時代後後半の土器の住居址に5号址がある。アマツラ沢に面す台地端部にあり、1軒のみの発掘調査である。その他調査区域外の工事中のパトロールで水田造成時にすでに破壊された住居址1を発見している。この期の集落が、アマツラ沢に面す台地端部に南北方向に用地外区域にわたって展開されたものと推定され、5号住居址は集落の南端に位置していると思われる。

遺物は、土器では長胴化する壺・高杯・甕があり、甕高杯式である。須恵器には胎土、焼成精良な高杯があり、鉄器では尖頭鋼の出土をみている。

平安時代の遺構は発見されなかったが、用地外の台地の北側の畑で飯田地方の須恵器片を表面してあり、この期の遺構の存在も考えられる。

### (4) 中世

中世では堅穴住居址をなす15号址、小さな竪穴をもち、掘立柱の織造物をもつ21号住居址を調査している。遺物は中世陶器片を主体とするが、この中には良質な天目茶碗、黄瀬戸が含まれており、黒・スリ鉢・甕があり、内耳土器・山茶碗の出土を、有力な中世家臣団の居住の地とみられる。

# 調 査 組 織

中世における伊賀良庄の中心は、伊賀良地区にあったとはいえない。鎌倉時代の江馬北条氏の地頭代四条頼基の館跡が、中島平の北の段丘上の殿岡にあった<sup>(3)</sup>考証はある。三日市場の地名は後のものとしても、殿岡の市場屋敷、公文所等の中世に関連する地名。また、中世の下ノ城跡は中島平のすぐ南の台地上にある。信濃守頼朝小笠原氏の松尾城、静岡城の築城とあわせて、伊賀良、松尾への井水伊賀良井(大井)の開発は室町時代小笠原氏<sup>(4)</sup>によって行われたとされている。このような歴史的背景において、中島平の位置は中世家臣団の居住の地として選ばれたことは当然といえよう。

- 注1 神村通「里田地方における弥生時代打石器」日本考古学の諸問題 1964  
 2 佐藤 「清水遺跡」 飯田市教委 1976  
 3 高下 操「伊賀の庄園」下伊那史第六巻 昭42  
 4 関井善蔵「室町時代の伊賀良」伊賀良村誌 昭48

## ま と め

中島平遺跡の発掘調査は用地内の南側4,500㎡について行なったものであるが、水田造成時に削り採られ破壊された遺構は多いとみられ、その集落を把握するには不十分なものとなった。

縄文時代では、早前期とみる有舌ポイントの出土、早期末茅山式、前期末晴ヶ峯式の住居址の調査とそれら時期の好資料を得たことは予想外の成果であった。中期末の加曾利E期の遺構は当初の予想に反して発見される。この期の土師片を輸出したのみであるが、用地外の南にのびる台地上に遺構の存在は予想される。

弥生時代では中期末の恒川式から後期産光寺原式・中島式前半の住居址14を調査し、多くの資料を得たが、出土石器の僅少さは従来の飯田下伊那地方の発掘例と大きな相違をみており、また鉄鐮の出土は注目され、今後の研究課題を提示したものと見えよう。

古墳時代の土師器前期の土器、中期前半、後期後半の住居址とその遺物に好資料を得ている。

中世における住居址と良質な陶片の出土は室町時代における伊賀良庄、伊賀良井の開発、下ノ城跡等に関連する武士団の居住の地として捉えたい。

おわりに今次調査にあたって県教委文化課今村善興指導主事の御指導、神村通、宮沢恒之助先生の助言があり、地形地質については松島信孝先生の御指導、作業にあたられた方々の熱心な作業態度が大ききな力となったこと、市農林課藤本照之技師、工事を請負われた岩手屋建設のご理解御協力のあったことを感謝したい。

(佐藤 勉 信)

### 1. 中島平遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

橋本 玄 達	飯田市教育委員会委員長
平田 英 夫	飯田市教育委員
勝野 好 一	〃
沢 柳 俊 夫	〃
森本 信 也	飯田市教育長
相 津 実	飯田市教育委員会事務局 社会教育課長

### 2. 調査団

団 長	佐藤 勉 信
調 査 員	今村 正 次

### 3. 指導者

大 沢 和 夫	飯田女子短大教授
今村 善 興	長野県教育委員会文化課指導主事

### 4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課	
相 津 実	社会教育課長
山下 舜 平	課長補佐 係長
木下 一 彦	係 長
木下 章 治	〃
林 茂 喜	主 事
林 貞 子	〃
松 沢 健	社会教育主事

### 5. 伊賀良地区農業構造改善事業担当

農 林 課	課長 小 倉 正 一
〃	係長 小 林 衛
〃	技師 藤 本 照 之 菅 沼 良 収

### 6. 作業員

北村 重美	福島 明夫	牧内 住子	中平 兼重	春日 要
久保田安彦	西尾多三郎	宮沢 徳男	和田 利宏	今村 式郎
吉川 久子	吉川 弘美	今牧 成子	関島 久子	熊谷 ひさ
下平あや子	今村 澄子	下平 孝子	岡庭 学	中平 一夫
池田 弘美	田口 三郎	佐藤いなな	田口さな美	

# お わ り に

昭和51年度の伊賀良地区農業構造改善事業は、三日市場を中心とした地区が実施されることになったので、事前に事業担当部署と協議及び現地調査を行い、昭和51年9月17日付文化庁に対し、埋蔵文化財発掘通知書を提出し11月21日より発掘調査の作業に着手した。

三日市場中島平はやや東に傾斜した台地で北側に川があり遺跡散布地としての条件が整っているので数多くの遺跡、遺構が存在するものと考え慎重に発掘調査が進められた。

今回の事業費は総額2,000,000円でうち600,000円は文化庁の国庫補助対象分で国庫補助300,000円県費補助90,000円、市負担分210,000円、計600,000円、残1,400,000円については農業構造改善事業費の中から負担金として飯田市教育委員会が受け直轄事業として行い、埋蔵文化財発掘調査記録保存事業が大きな成果を残してここに完了しました。

この発掘調査は耕地（水田）であるため秋の収穫期の終了後に開始しなければならない状況下であり、また天候に左右される要素も含んでいるので多少問題はあったが、幸い土地所有者をはじめ関係各方面の方々の格別な理解と援助とご指導によって、当初計画していた面積の調査が出来貴重な資料等が発掘され感謝にたえない。

調査体制は、団長に佐藤勉信先生、調査員に今村正次先生をお願いし、先生方の経験豊かな知識をもって終始献身的に協力をいただき、指導者の飯田女子短大教授大沢和夫先生、県教育委員会文化課指導主事、今村善興先生には適切な助言をいただき、地質指導は松島信幸先生をお願いしました。また報告書の執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもって当られ、ここに完了したことに深く敬意を表します。

昭和52年3月

飯田市教育委員会 社会教育課

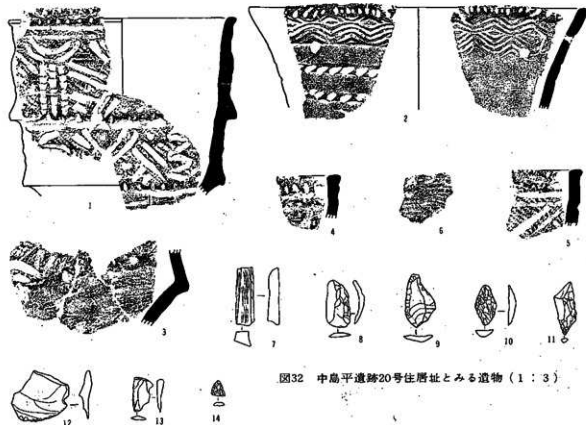


図32 中島平遺跡20号住居址とみる遺物 (1:3)

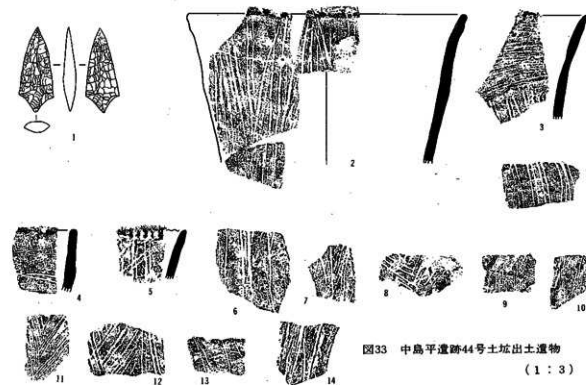


図33 中島平遺跡44号土壇出土遺物 (1:3)

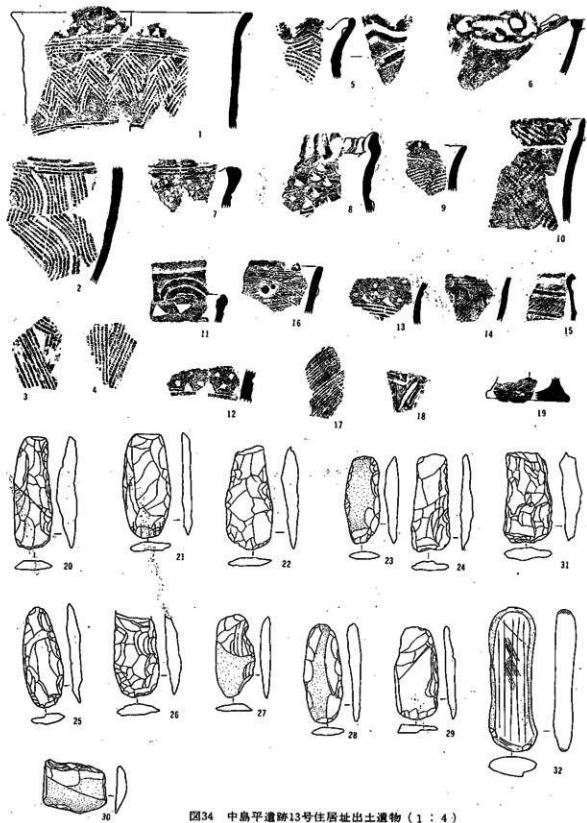


图34 中岛平遣跡13号住居址出土遺物 (1:4)  
(1~30…床, 31·32…覆土)

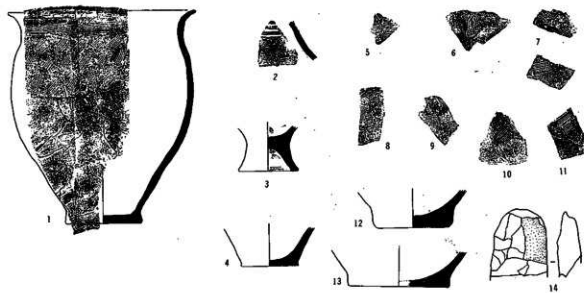


图35 中岛平遣跡1号·2号住居址出土遺物 (1:4)  
(1~4…1住, 5~14…2住)

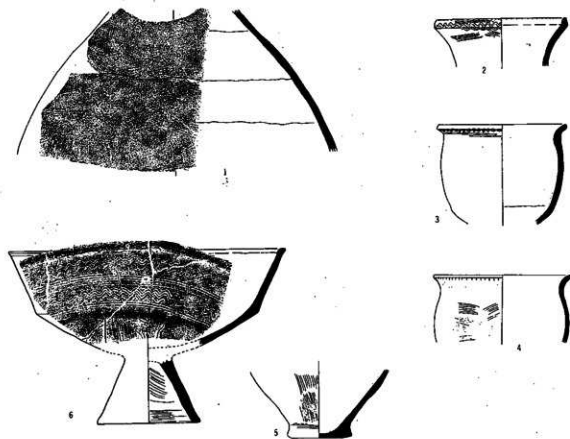


图36 中岛平遣跡3号住居址出土遺物 (1:4)

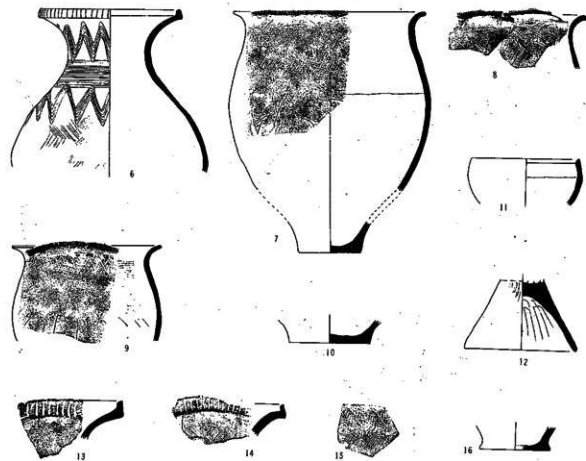
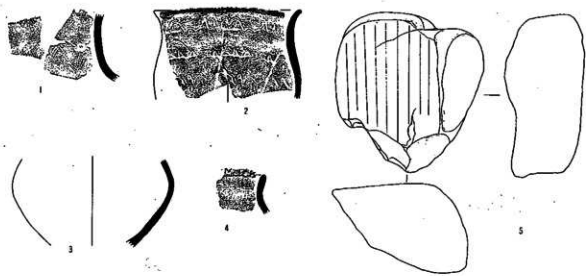


图37 中岛平道跡6号·7号·9号住居址出土遺物(1:4)

(1~5…6住, 6~12…7住, 13~16…9住)

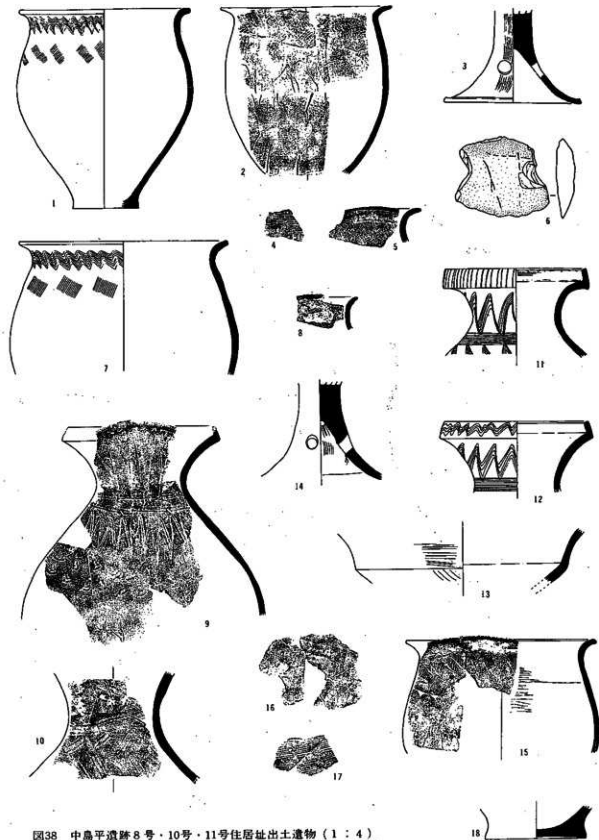


图38 中岛平道跡8号·10号·11号住居址出土遺物(1:4)

(1~6…8住, 7·8…10住, 9~18…11住)



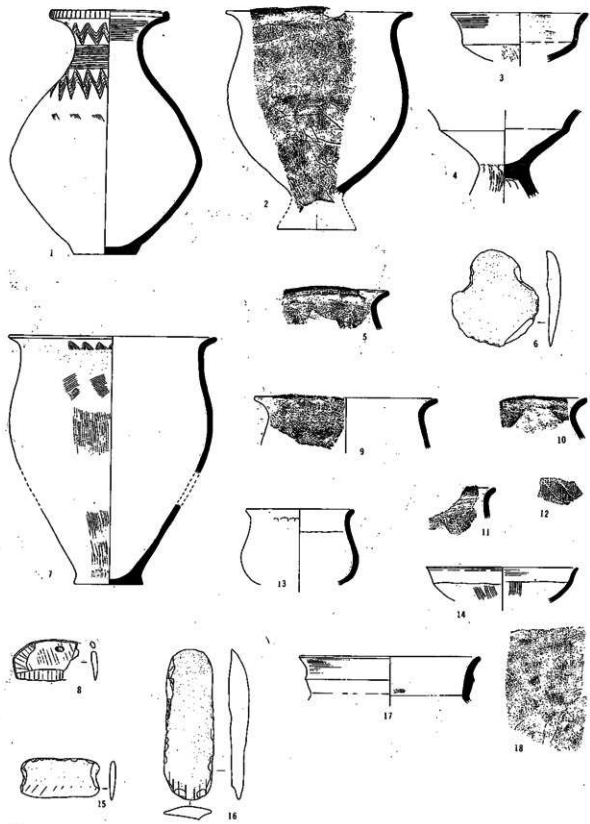


图39 中島平道跡14号·18号·19号住居址出土遺物(1:4)

(1-6...14住 7-8...18住

9-18...19住(17, 18...覆土)

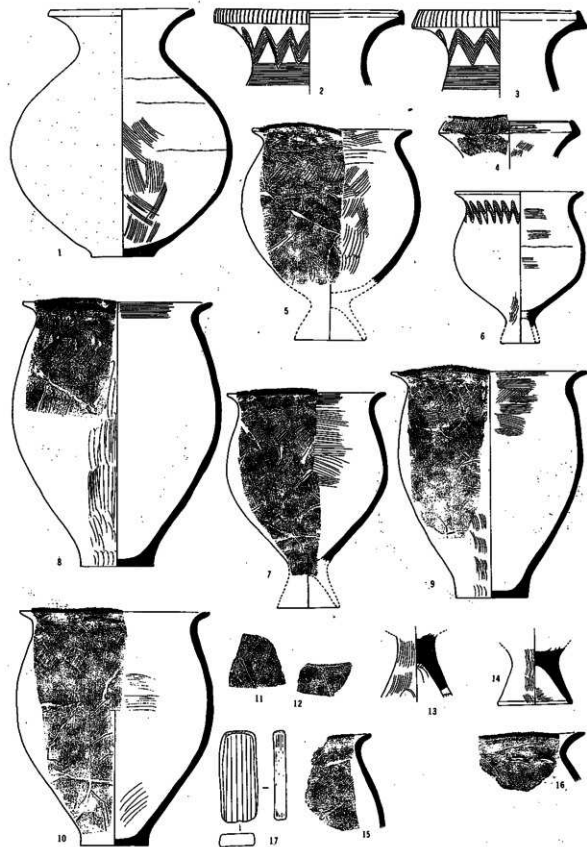


图40 中島平道跡17号住居址出土遺物I(1:4) (1-6...15住, 7...21住)

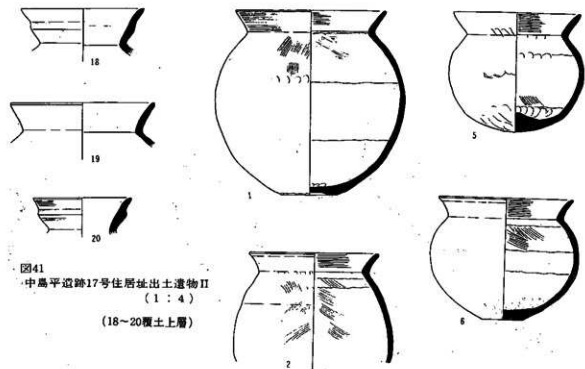


图41  
中島平遺跡17号住居址出土遺物II  
(1:4)  
(18-20覆土上層)

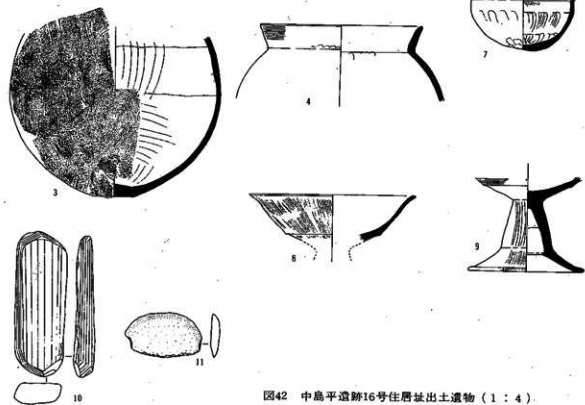


图42 中島平遺跡16号住居址出土遺物(1:4)

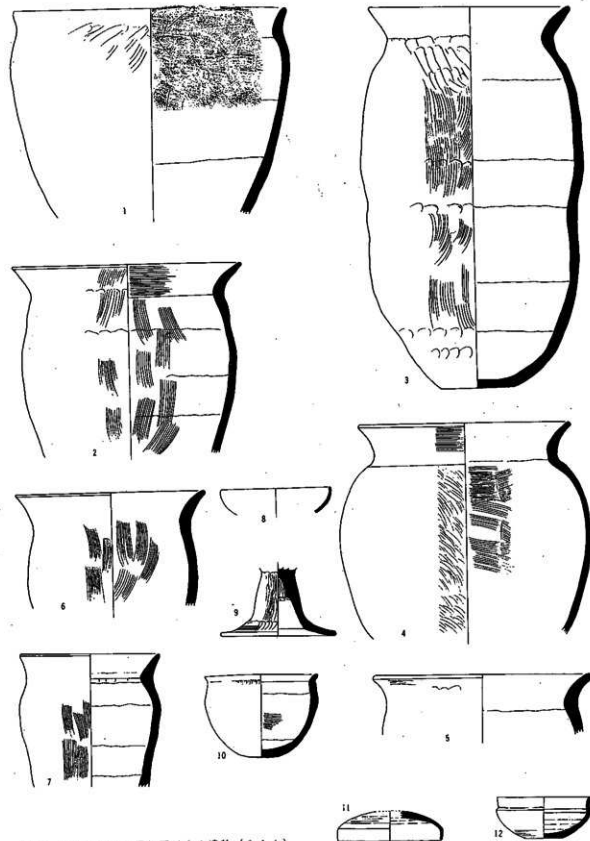


图43 中島平遺跡5号住居址出土遺物(1:4)



图44 中島平遺跡15号・21号住居址出土遺物(1:4)



图45 中島平遺跡7号住居址上層出土遺物(1:4)

(1…土1, 2・3…土14, 4…土11,  
5…土56, 6…土5, 7…土46, 8~10…土39  
11~13…土35, 14~22…7住上層)

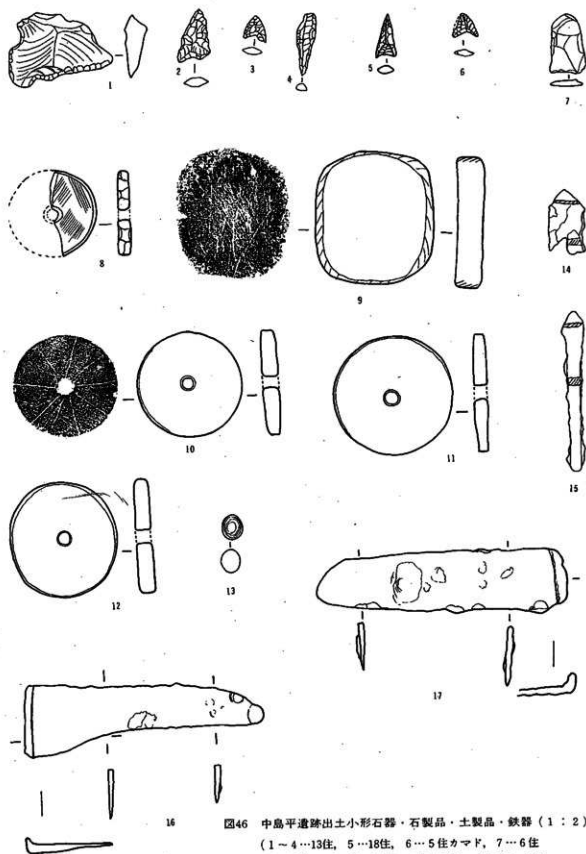


图46 中島平遺跡出土小形石器・石製品・土製品・鉄器(1:2)

(1~4…13住, 5…18住, 6…5住カマF, 7…6住  
8…17住, 9~12…14住, 13…16住, 14・15…5住  
17…5住上層, 16…19住)

図版1 遺 跡



遺跡を南から



遺跡を西から



遺跡を南から（調査直前）



遺跡を北から（調査直前）



工事終了後の遺跡（南から）

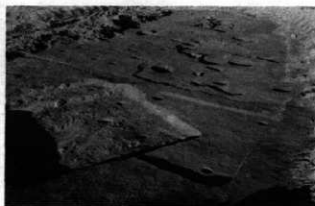


工事終了後の遺跡（北から）

図版2 遺構



I調査区遺構全景 - 西から



I調査区の遺構 (1・2・3号住居址と土壇群I)



I調査区遺構全景 - 東から



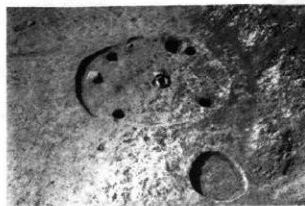
II調査区の遺構 - 西から



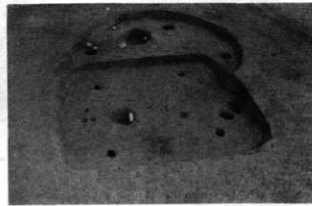
III調査区遺構全景 - 西から



III調査区遺構全景 - 東から



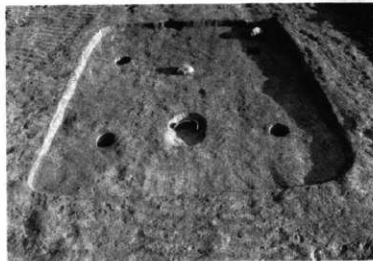
20号住居址と土壇55号



8号住居址と13号住居址(上)



20号住居址の炉址



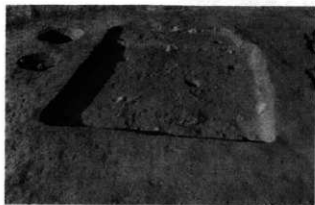
3号住居址



3号住居址の炉 - 土器を立てる (北西から)



3号住居址の炉 (南東から)



1号・2号住居址と土坑1・2号



2号住居址の上部集石 手前は1号住居址



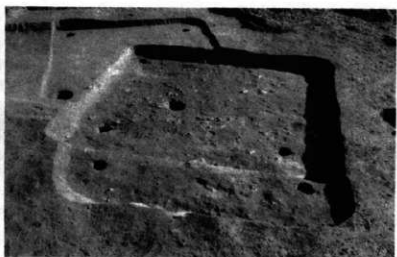
7号住居址



7号住居址 炉



1号住居址甕の出土



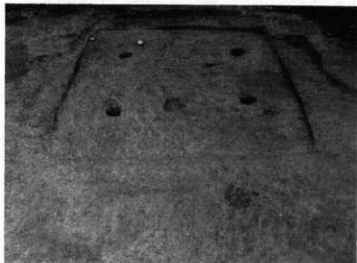
1号・2号・4号住居址 (前から1号・2号・4号)



7号住居址 甕の出土



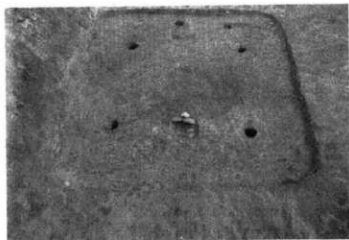
7号住居址上部集石



6号住居址



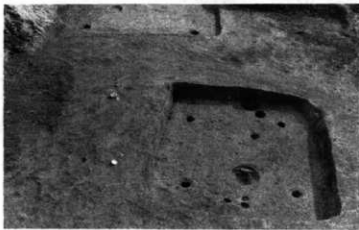
6号住居址 炉



10号住居址



10号住居址 炉



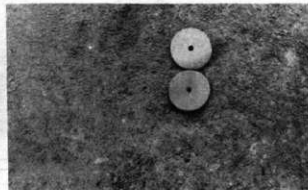
8号住居址(下), 9号住居址(上)



8号住居址 跡



14号住居址



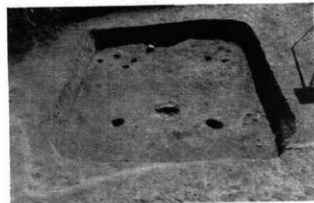
14号住居址 紡錘車出土



8号住居址有層状形石器出土



11号(上), 12号(前)住居址 (西から)



17号住居址



18号住居址



11号(下), 12号(上)住居址 (東から)



11号住居址 礫の出土



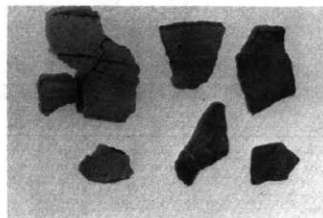
19号住居址



19号住居址 鉄錘の出土



土城44号出土の有舌ポイント



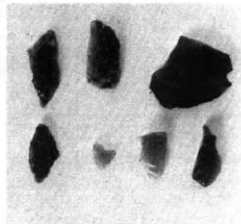
縄文早期末の土器 - 左3こは20号住  
右3こ(上1・下2こ)は土城44号下層



14号住居址出土 甕



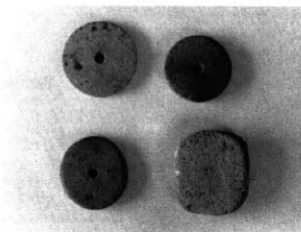
14号住居址出土 白付甕(舌部を欠く)



縄文早期末の石器-20号住居址とみる



縄文前期末の土器 - 13号住居址出土



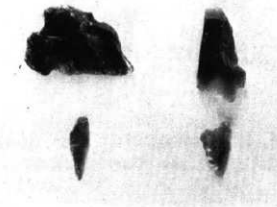
14号住居址出土 紡錘車



1号住居址出土 甕



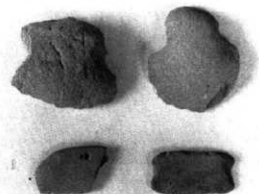
縄文前期末の土器-13号住居址出土



縄文前期末の石器-13号住居址出土



11号住居址出土 壺



弥生後期住居址出土の石器





17号住居址出土甕



17号住居址出土甕



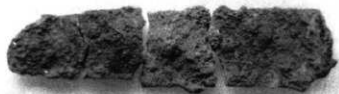
17号住居址出土甕



17号住居址出土台付甕(台部を欠く)



7号住居址出土甕



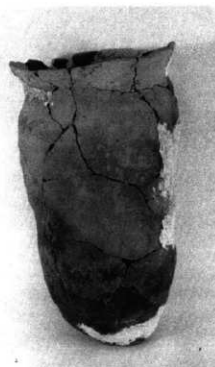
5号住居址上層出土 鉄鏝



19号住居址出土鉄鏝(表)



19号住居址出土鉄鏝(裏)



5号住居址出土 土師器甕



16号住居址出土 土師器甕



16号住居址出土 土師器甕



5号住居址出土 須恵器坏

図版4 発掘スナップ



調査にかかる



I調査区遺構検出



土壇群Iの検出



5号住居址の調査



---

伊賀良中島平

埋蔵文化財発掘調査報告書

— 縄文早、前期、弥生後期、古墳時代の集落址 —

1977.3

長野県飯田市教育委員会

---

印刷 株式会社 秀文社